スーパーロボット大戦A B s ・ O Gサーガ〔 1 〕

T A K E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦ABS・OGサーガ〔1〕

【Nコード】

N9537V

【作者名】

TAKE

【あらすじ】

スーパーロボット大戦ABS・OGサーガ

正式な読み方「スーパーロボット大戦アンブレイカーズ・OGサーガ」

この物語はスーパーロボット大戦OGシリーズに準拠しています。
参戦作品

OG、魔装機神、SRW・EX、オリジナル

この物語の開始される時系列

OG 1 終了以降（新西暦 187 年）

補足

魔装機神の時間系列でいうと1部以降で2部開始前

章の切り替えにて登場人物を紹介していきますが、あくまで出演する人物のみの紹介となります。

登場する兵器の紹介は、物語の都合上各章の最後に紹介させていただきます。

2011年08月

現在第二次SRW・OGの発売を待っている状態です。そのため製作側指針としてOG 2 外伝までの設定と展開に準拠していきます。

第二次OG発売により、小説内の物語と第二次OGの物語が矛盾する場合はどうかご容赦のほどおねがいたします。

#0「」の章のはじめに（前書き）

この章の登場人物

#011の章のはじめに

あらすじ(0)

地上世界の傭兵ジジ・フラグは地球へゆるやかに落下する小惑星へ、ゲシユペンストmkIVを向かわせた。

落下する小惑星は既に地球の重力へ引かれ、落下の阻止は不可能だった。

地球は破滅すると知りながら、ジジ・フラグは小惑星へ機体を進める。

そこで義父が戦っているからだ。

義父は作戦の成否に関わらず死ぬであろう事をジジは予見していた。不世出の英雄に相応しい死を与えるために、ジジは義父と刃を交える。

遂に義父の操縦する機体を両断する。

ジジの胸中に後悔は無かった。

男とは死するまで闘う。

ジジには頑なな決意がある。

戦いはまだ終わっていない。

ゲシユペンストmkIVが翻り、小惑星へと向かう。

激突まで小惑星の重力ブレーキを起動させれば、地球の被害は抑えられるはずだ。

ジジはそう考えていた。

小惑星へ肉薄するゲシユペンストmkIVに敵機が殺到する。

その時まばゆい光が、戦場を包み込む。

その輝きはジジのコクピットまで及んだ。

全てが終わったのだ。

火星・移民軍の総帥。地球連邦政府による弾圧に対する報復として小惑星を地球に落下させる任務を帯びる。
ジジ・フラグの義父。

トトカ・アーヴィン

サザ公国の現国王。サザ公国とバゴニア連邦の戦争に翻弄されている。

ルルルとランの父親でもある。

今の光は何だ？

コックピットにまで光が届いたとき、砲弾がエンジンに直撃したのだと思った。

ミラージユ「ゲシュペンストmk4」そのものが爆発し、自分は蒸発した。

……どうやら違うようだ。

スロットルを握る手とフットペダルを踏む足は、力強いエンジンの鼓動を感じている。

生きているのだ。

そうやって自覚すれば、指先がコンソールを滑り、機体情報をモニターに示させる。

ミラージユのAIが新たな演算を開始する。

地球上空500メートルを飛行中…

現在位置……

「ANKNOWN」

地球衛星軌道上の通信衛星全てが破壊されたとでもいうのだろうか。

「ジャミングの散布は？」

『否定』

AIは短く回答する。

『索敵範囲内に機影7・交戦中』

AIが新たな情報を表示し、サブカメラが自動望遠で状況を捉える。

『マーカー>識別<無し・未確認機体と推定』

『肯定だ』

鈍重な甲虫のような機体を青い羽虫のような機体が包囲している。

甲虫のような機体は装甲で剣撃をいなしながら羽虫の一機に張り

付いている。

一見して無謀に見えるが、背後と側面に対する防御は即応し、分厚い装甲で受けることで機体への致命傷は避けている。

羽虫の部隊は、持久戦に持ち込んで被害を抑えているようだった。「間違いではないのだがな……」

兵を大事にし過ぎている。

手堅いが凡庸な指揮官かもしれない。

その時、青い羽虫のような機体が2機こちらを向いた。

ほんの僅かな動きだった。

熟考できない。

直感だった。

退く。

地域情報は皆無だが、まず戦闘領域から撤退。

発砲を受ければ、斃す。

『距離800メートル』

AIが告げる。

(……来る)

闘気のようなものが向けられた。

分厚い装甲と空間の隔たりがあったが、確かに感じた。

「青い未確認機を敵性機体と認識」

即決だった。

『了解』

AIが短く答える。

「青い機体群をBEと認識、襲撃されている機体GEと認識」

AIによってレーダー上の「UNKNOWN」に仮の識別とコード名が割り振られる。

「エンジン出力を戦闘モードへ移行」

コックピットに低く唸るようなエンジン音が響く。

ミラージュが巡航出力から戦闘出力へと切り替わったのだ。

操縦桿のホイールを操作して、機体のコンディションを图示させ

る。

簡易図形で表示される体位の大半は青から緑で表示される。

幸い前回の戦闘での消耗は機体に負担を与えていなかったようだった。

肩のミサイルボックスと全ての銃のアイコンは明度を落として表示され、機体から排除されている事を示している。

残された武装は大型ビームサーベルとトライ・ビームシールドだけだった。

ミラージユは武装の大半を失っているが、本来の機能や機動力を失っているわけではない。

射撃兵器を喪失していることは大きなビハインドではあるが、その事実が青い未確認機群に露見しているわけではないはずだ。

射撃の差し合いを排した、高速接近戦それ以外活路はないだろう。時間と共に戦闘力は分析され、状況は刻一刻と不利になる。

今はミラージユの機動力を信じるだけだ。

ジジは思考の中から、相手がミラージユよりも素早いであろう可能性を消した。

その予見が当たっていれば死んでいる。

ただそれだけだ。

ミラージユの握るビームサーベルから、弾ける光の奔流が奔り出す。

罅口から熱気を帯びた長大な刀身が形成される。

『残り稼働時間65秒』

AIが大型ビームサーベルの稼働時間を告げる。

この大型ビームサーベルは最大30メートルまで刀身を伸ばし、相手の剣や装甲を難なく溶断する。

しかしその代償は大きく、70秒ほどの稼働時間に対し100秒の冷却時間を要するのだ。

「いくぞ」

ジジがフットペダルを大きく踏み込む。

ミラージュのバックパックに装備されたテスラドライブウイングが、燐光を放ちながら唸りを上げ、背後に空間を爆発的な斥力場で押し続ける。

総重量58.8トンの膨大な質量が、青い機体に向かって飛翔する。

青い機体BE03は剣を突き出したまま滑空し、ミラージュに向かって突進する。

その挙動は人の知覚を超えた速度に対して、あまりに緩慢でのもまだった。

ジジは操縦桿のホイールを押し込んでトリガーを引く。

ミラージュは加速をやめ、青い羽虫の前で文字通り静止し、僅かに右に身を滑らせた。

コクピットのジジは急停止で重力に嬲られるのだが、それに頓着しない。

構えただけの大型ビームサーベルから極太の熱気が奔り、青い機体の腰を両断する。

2機目のBE04の背後に回りこんだ動作が斬撃そのもので、同じように腰から両断された。

「損害報告」

『皆無』

「掃討するぞ」

ミラージュは再び飛翔しながら、速度を上げる。

次に甲虫のような機体を囲む戦闘の輪に突進する。

青い機体群は完全に算を乱していた。

ミラージュに対して対応しようとするのだが、それは同時に今戦闘している敵を放置してしまう事になる。

そのような好機を今まで耐えてきたGE01が見逃すわけも無く、1機に大して突撃を仕掛け、包囲網から抜け出す。

その動きに呼応し、1機がフォローに向かう。

「バランスのいい布陣。ただそれだけだ」

ディスプレイに写るレーダーはミラージユが3機に囲まれている事を示しているが、既に数的な圧力は薄くなっていた。

ミラージユが加速と停止の機動を繰り返して敵を攪乱する。

その度にパイロットのジジはGキャンセラーによって軽減されきれないGが襲う。

ジジはそれに頓着しない。

疲労する体が淀みない動作でフットペダルを踏み込む。

テスラドライブウイングが背後の空間を斥力場で押し出す。

ミラージユが再び音速を超えた質量へと変貌する。

ミラージユに対応する3機は、動きに呼応して動くのだが、ミラージユの機動は彼らの認識を遥かに超えていた。

3機目のBE01が速力を活かした袈裟懸けで真っ二つに割られる。

ミラージユの斬撃が右に流れる。

背後に回った2機が撃ち終わりを狙って斬りかかる。

ミラージユのテスラドライブウイングが光る粒子を撒き散らしながら、機体を大地に滑らせながら回転させる。

ミラージユが、背後の2機と向き合う。

斬りかかった2機の胸部は既に横一文字に溶断されている。

BE05、06の2機が崩れ落ちるように倒れる。

ミラージユは振り向いた動作と同時に、長大化した大型ビームサーベルの刀身を振りぬいていたのだ。

「残り2機」

ジジが押し殺した声で言う。

『ビームサーベルの残り稼働時間3.5秒、機能停止までカウントを開始します』

AIが警告を告げ、カウントを開始する。

耳元のスピーカーではAIがカウントを刻み続けている。

甲虫の様な機体に取り付いていた2機が戦闘を放棄し、跳躍する。バックパックからは推進剤が燃焼され、機体を低空ながら高速で

飛行させる。

「無駄だ。 エンジン出力、戦闘から最大出力へ移行」
「了解」

ビームサーベルのカウントを続けるAIとは違う音声が表示する。
コクピットへエンジンの駆動音が一層強く響く。

ジジがフットペダルを踏み込む。

テスラドライブが制限された出力から開放され、本来の力で背後の空間を押し出す。

ミラージユは文字通り疾風の刃となって、逃走する二機を追撃する。

逃走するBE04、07の2機の間をミラージユが通過し、ビームサーベルの刀身が赤い軌跡を残して翻る。

数瞬遅れて爆発が起きた。

「損害無し」

AIが告げる。

機体にこそダメージは無いが、慣性を無視した機動をすれば体が悲鳴を上げていた。

甲虫のような機体GE01がこちらに腕を向けていた。何なのか？そう思った時にはペダルを踏み込んでいた。

同時に砲音が轟く。

砲弾ははるか後方に着弾し、土煙を上げた。

「殺すわけにもいかない……か」

単純に恩の押し売りはできないものだ。

『距離300』

AIが告げる。

咄嗟に踏み込んだだけだが、ここまで距離が開くか。

「便利さに慣れ切れないものだ」

「サーベル出力をトリガーに回せ」

『移譲……完了』

「いくぞ」

ペダルを踏み込む。

ミラージュが音速で甲虫のような機体の右横を通り過ぎる。

GE01の機体の右腕が肘から脱落する。

たじろぐような動揺が足運びに表れていた。

通過する時の斬撃の間合いを計って避けようとしているのだが、ジジはその瞬間に合わせてサーベルの刀身を操縦桿のトリガーを操作する事で操っていた。

背後に回って背中を蹴り倒す。

じたばたともがきながら起き上がるうとするのだが、片腕では思いうように起き上がることが出来ない。

ミラージュの大型ビームサーベルが翻り、残った左腕を肩から斬り、両足を切り払った。

同時にAIがサーベルの稼働限界を告げた。

「抵抗するな、殺すつもりはない」

ミラージユの外部スピーカーを使った。

「信じられない事だが、偶然戦闘に参加してしまった」

『翻訳用意できました』

AIが告げる。

「危害を加えるつもりは無い。機体から出てくれないか」

GE01の背中の中ハッチが開き、中から一人の少女が現れた。

淡い栗色の髪の少女だった。

「剣を向けながら、危害を加えないとはどのようなことか」

よく通る声だった。

「状況を掴めないまま、戦闘に参加した。劣勢な方に味方をすれば、

話くらいはできると思った」

「無礼な」

「そう思う。俺は名乗ってもいなかった」

「ハッチオープン」

『・・・了解』

AIが逡巡したように告げた。

ミラージユが跪き、ハッチが開く。

差し出された手に乗って、ハッチのある背中に飛び移った。

思ったとおり、淡い栗色の髪だ。

「ジジ・フラグ、所属は無い」

「私はルルル・アーヴィン、サザ公国の王女である」

やはりよく通る声だと思った。

右手に握った携帯モジュールを見た。

「サザ公国という国家、団体は確認できません」

この携帯モジュールはミラージユのAIと繋がっているため、自動

検索された情報が即時に送られてくる。

この世には無い国……か。

「ジジ・フラグよ、所属が無いとはどのような事か」

「主人を持たないだけだ」

「主人を持たなくても、故郷はあるだろう」

「それも無い。ただの男という以外名乗りようが無い」
「私を女だと思って、愚弄しているな」

ルルルの目に強い光が灯る。

同時に心を閉ざそうとしているのだ、と感じた。

「俺の身の上を知ってどうする？俺はここがどこか知りたいだけだ」

「地上人のふりをして！」

「地上人とはどういうことだ。ここは地球ではないのか」

「芝居はもうよい……バゴニアも悪辣な手を打つものだ」

ルルルが腰から短刀を抜く。

「私はバゴニアに利用される気は無いっ！」

ルルルが短刀を自分の喉元に突きつける。

ミラージュが機体を揺さぶる。

揺れる足元に構わず、ルルルに向かって走る。

バランスを崩すルルルの手を短剣の柄ごと右手で握る。

ハツとしたルルルが短剣を喉に刺そうとするが、短剣がその場に固着したように動かない。

「ぐっ……」

ルルルの鳩尾に左拳を打ち込む。

絶息するルルルと視線が合う。

燃えるような瞳が力を増し、かき消える様に光が失せた。

「地上人……か」

空を見た。

太陽はある。

地底では無いはずだ。

ルルルの言った「地上人」をかみ締めるように呟いた。

「ここは……どこだというのだ」

呻き声を漏らしてルルルが覚醒した。

「起きたか」

ジジが言う。

目の前の携帯用のガスコンロの上のポットがぐつぐつと音を立てている。

夜気は冷たく火の傍は暖かった。

「お前はジジ・フラグ」

ルルルが立ち上がって身構える。

ジジは立たなかった。

「短気は起こすな、拘束をしなかったことを俺の誠意と思って欲しい」

ジジはガスコンロの火を見つめている。

「……」

「短刀も手元にあるだろう」

「……なぜ？」

ルルルは用心深く視線を逸らさず腰の短剣を握る。

「大事なものだろう」

「……」

「年季の入った剣だが、よく手入れされている。誰かに譲られたものなんだろ」

「そうだ」

「奪っていい物じゃないと思っただけだ」

「危ないとは………思わなかったのか」

「思わないね。お前に俺は殺せないし、俺はお前に死ぬことを許さない。自分で生きること死ぬこともできない人間を恐れることとはないな」

ルルルが肩を震わせる。

わななく震えは全身に及んだ。

震えを収め、ルルルが俯く。

「命一つ、いや二つ貸したとでも言いたいのか」

「そうだ。貸し借りできないものを「貸した」この事は分かるな」

ルルルは俯いたままだ。

「この世界の情報を教えてくれ。ここは地球じゃないんだろ」

「……」

「俺の世界では太陽は東から昇り、西へ沈むのだ。それがこの世界で太陽はいつまでも中天にある。夜に近付くにつれて太陽は消え、月が現れたんだ。……ここは地球じゃない」

「……本当に地上人のようだな」

「ああ」

「教えよう、その代わりに貸しは一つ返したぞ」

「貸し借りなんて例え話だろうに」

命の貸し借りなど出来る話ではないのだ。

今の彼女をわかりやすく言っただけだった。

「私にも誇りはある」

自虐的な響きがあつた。

黒く澄んだ瞳を長いまつ毛が隠す。

「まあ、飲め」

ルルルに金属製のカップを渡す。

「白湯？」

「生水を飲みたくないだけだ」

ルルルにこの世界の概要を簡単に説明してもらった。

この世界は地球内部に存在するラ・ギアスというものだった。

ラ・ギアスそのものが人工物に近く、この世界の住人に対しての先史文明がこの世界を作ったのだ。

言われてみるとその通りで、円筒状のスペースコロニー同様地平線の角度が逆に存在している。

なぜ俺がこの国に召喚されたのかを聞けば、何者かの召喚魔術か地球とラ・ギアスを繋ぐゲートに触れたかのどちらかと言った。

ルルルは恥ながらも、心中助けを願ったが自分は高等魔術を習得していないので召喚は無理だったと言った。

ただし俺がこの異世界に召喚されたかもしれない事実を鑑みれば、魔法という技術がペテンではなく事実として存在しているのだと実感した。

そしてこの土地はエオルド大陸の西端に位置するサザ公国といわれる国だった。

隣国のバゴニア連邦とは休戦中であつたが、偵察に侵入した部隊と交戦し、俺はそれに巻き込まれたということだった。

今の現実を受け容れられないといった感情は沸き起こらない。

今までも世界を放浪しながら傭兵をやっていた、

今度は偶然地球とは地続きではない土地にやってきただけなのだ。

異世界でも戦争は続いている。

この世界でも生きていくことは難しくない漠然とそう思えた。

大方内容が飲み込めた。

ジジはマグカップの中身を煽った。

温くなった白湯が喉を潤した。

「これからどうするつもりだ」

ルルルが言う。

「お前を父親に届ける」

「それは不味い。私を撃墜したお前を陛下は許さないと思う」

「いいさ。理由も無く野垂れ死ぬよりは、いくぶんかマシだ」

「……本気で言っているのか？ 私は助けられたことを恩義に感じている。だから便宜だつて図るつもりなのだ。リーン市に私を届ければいいだけだ。無闇に王城へ行き、陛下に会わない方がいい」

「俺が居なければ、王様に要領を得ない事を答えなければならぬ。

『窮地を地上人が唐突に召還され、助けられた』とな。その場

に俺が居なければお前が困るだけだ」

「陛下が私を信じない。と言うのか」

「お前は軍というものをまるで分かっていない。部下と機兵を失っておいで、理由がはつきりしないなど許されることではない。サザ公国の軍法は知らないが、厳罰が待っているだろう」

「……」

ルルルの顔が青くなり、視線が宙を泳いでいる。

彼女は口調や態度こそ尊大だが、軍歴はまだ浅いようだった。

芯の強さこそ感じるが、人間味に重厚さが無い。

もしかすれば彼女は、自分が思った以上に少女なのかもしれない。

「歳はいくつだ」

「15」

……じゅっ。

口の中で噛み締めるように呟いた。

若すぎる。

可憐な少女が軍に所属している、というだけで心の中にある深い傷をえぐられた様な気持ちになる。

そう思えば、ルルルの簡潔な軍人らしい喋り方がより一層心を暗澹とさせた。

「軍歴はいくつからだ」

「12、女が軍人をやっではいけないか」

「侮っているのではない。ただの感傷だ」

「感傷とは無縁な、鉄で出来たような顔をしているのに」

鉄で出来たような顔。

言われてみればそうだった。

「確かに、優男ではないな」

「言い過ぎただろうか」

「ふ…言い得ている、癪だがな」

ポケットの中の携帯モジュールを操作し、ミラージュを待機出力から巡航出力に上昇させる。

夜陰に溶け込んでいた機体が振動と共に目覚める。

コクピットハッチが開き、自動で乗降姿勢になった。

「行くか」

「そうか……行こう。私はこの僅かの中にそなたと分かり合えたような気がする。なにが、とは言い表せないのだが」

「明日には消えているような男だ。心に残すまでも無い」

「不遜な言い方だ。首を捻じ切ってやりたいほどに」

ルルルの言う鉄の様な顔で微笑んでみた。

顔の筋肉が軋む。

彼女の言うとおり鉄の様な顔なのだ。

ルルルも微笑む。

憂いと悲しみを湛えた表情だった。

言葉には出さないが、その目は「死ぬな」と訴えている。

首を振った。

「ここから先は命一つだ。命は大事に仕舞っておくものじゃない。

時には無造作に使ってみるものだ」

微笑むことが出来た。

本当に思っていることを言えたのだ。

「一つ聞きたい」

「何だ？」

「地上人は皆、そなたのような大馬鹿者なのか」

「そうだったら単純なんだがなあ」

ジジはリーン市に到着すると、ミラージュの掌にルルルを載せたまま大通り沿いを飛行させた。

市内に入ってから左に戦闘ヘリの出来損ないのような機体が張り付いてきた。

ルルルに問いかけると、グラフドローンというこの世界の偵察機だった。

ディスプレイにグラフドロンのキャノピーを映し出す。

操縦者とミラージュの目が合う。

操縦者が小さな動作で敬礼をする。

ミラージュにも地上世界の流儀の敬礼を返させる。

操縦者が微笑んだように見えた。

王城は機兵によって埋め尽くされていた。

ルルルが言うには、その機体はルジャーノール改とよばれるものだった。

ルルルが事前に破壊されたゴリアテの通信機で王城へ通信していたのだが、警備は物々しい緊張感で張り詰めていた。

城門に到着すると、まずミラージュの掌からルルルを下ろし、自分も降りた。

戦闘の意思が無い事を告げ、兵士が両脇に立つ。

ルルルは軍の高官らしき男と会話している。

案内役を受けた官吏は困惑した表情だった。

ルルルの口添えのおかげで狼藉者なのか功労者なのかまるで分からなくなっていたからだ。

その後は拘束されずに控えの間まで案内され、王に下問を受ける流れとなった。

玉座の間に通されるとそこには国王を始めとし、大臣や高官が集まっていた。

何より長銃を手にした衛兵がざつと50人近く配備されていた。

「そのほうがジジ・フラグであるか」

控えの間で、宰相が質問をすると聞いたが、質問というより尋問に近かった。

「御意」

「地上の人だというのが真か？」

宰相が言う

「重ねて御意」

ジジは平伏せず立ったまま喋る。

両脇で監視する兵士が咎めるのだが無視した。

「証拠を示せ」

「俺の出自を立てる証拠は何も無い。俺はお前たちのいう地上人だからな」

「お主の所持品から吟味し、判断を下して構わないのだな？」

「そうすればいい」

「次に、お主はルルル様と交戦したと報告を受けている。結果的に姫様を救出している事となるが、反抗された場合はどうするつもりであった」

「殺しただろう」

「殺意を否定しないのか」

「俺と彼女では力量に差が有りすぎた。だからこそ屈服させる事ができたという結果に過ぎない」

質問を続けようとする宰相を国王が制止する。

玉座に座った男は40代くらいの歳に見えた。

「余がサザ公国王トトカ・アーヴィンである。まずはその方にわが娘を救ってもらった事の礼は述べねばなるまい」

「この者は、バゴニアの送り込んだ間者かもしれませぬ。姫様を救った事も、陛下に近付くための芝居かと存じ上げます」

大臣の一人が言う。

「なにより出来すぎた」

他の一人が言った。

「余の家臣は余所者が嫌いのようだ。もしも余が処断すると言え
ばどうする」

「闘えるだけ闘うまでです」
自然と笑みがこぼれる。

周りを見渡すと長銃が胸と額に照準されている。
向けられる殺意が血を熱く沸かせた。

弾は当たるだろうが、急所さえ逸らせれば、息絶えるまで闘う事が
できる。

「無駄死にはないのか」

トトカが手で銃を下ろさせるように制する、

「男とは最後まで闘うものです」
群臣が色めき立つ。

「はつきり言うではないかジジ・フラグとやら。その方……
死に場所を探しているな」

トトカが目を細めながら言う。
眼光が憐れみを帯びていた。

胸の奥にある想いそのものを言われた。
はつきりとそう思える。

「わざわざ余を怒らせるように言っている。そもそも余を試すな
ど、万死に値するのだから」

「容易くは死ねないでしょう。斃した者達を背負っているのです
から」

「何人だ」

「斃した者たちは、数限りなく
誰を斃した」

「戦で義父を、同じ戦で戦友を」
「そうか、父を殺したか」

「2日も経っていないことです」
「余にも分かるように言うのだ」

「俺がラ・ギアスに召還される前、自機の時計で35時間前の事になる。俺の義父が地球圏に叛乱を起こした戦争の最終局面だった」

「最終局面？ ただの兵士であるお前がそこまで読めるのか」

「この戦争は叛乱軍の勝利になっていたと思う。俺が防衛戦に参戦した頃には、地球に小惑星が落ちているところだった」

一人が「狂言だ」と言った。

その男を無視して話を続ける。

「義父は強かった。寡兵ながらも武装化した小惑星に拠って戦っていた。防衛線を抜いた後の戦いが苛烈そのものだった。緩やかに落下する小惑星に連合軍艦隊が追いつがるのだが、反乱軍の部隊が、いくつかその場に留まって足止めをした。誰も生き残っていないと思う」

「叛乱軍は生還する事を捨てた軍だったのか」

頷く。

トトカが首を振る。

「俺の参戦は出遅れてしまってたな。地球に落ちる小惑星を止められない、そんな時だった」

「その方は……戦に勝つことではなく、ただ義父を斃す事だけを望んでいたな」

「義父は呉不敗とまで呼ばれる男だ。英雄の中の英雄、その男を超える。あの瞬間しか無かったと思う」

「地球を救おうと思わなかったのか？」

「まるで無い」

「……」

「義父直属の部隊と戦闘となり、まず最初に義父を斃した。それからもほとんど紙一重の戦いで、俺は不意打ちを食らって死んだと思った。不意打ちを受けたと思ったのは、操縦席が光に満ちたからであつて。死ぬときはこんなものだと思つたよ。ルルルと話して、その光はラ・ギアスが俺を召還した光だった知つた」

「荒唐無稽な話だと思う。そして誰も救われない話だった」

トトカは深く玉座に腰掛け、眉間をしごいている。

「戦争が誰かを救ったことがあるか」

「しかし……聞いているだけで、何か圧倒するものが胸に刻み込まれるような闘いだっただけだ」

「戦しか知らない愚かな男たちが闘っただけだ。そもそも俺の狂言かもしれんよ」

トトカが心底可笑しそうに笑う。

群臣達も釣られて笑うのが笑みが引きつっている。

「お前に……王女では敵わないわけだ」

頭を垂れていたルルが跪く。

後ろに控えていたルルルを避けるように人垣が割れる。

「王女からの報告を分析したのか？」

「7機のアゲイドを瞬く間に斃した。お前は知らないだろうが、

王女が交戦した時は精兵が7機で追撃していたのだ。今思えば王

女は誘い出されたのだな。同数で圧倒されたのだから、敵は精兵

中の精兵だろう」

「敵の錬度よりも今回の戦闘は指揮官のせいだ」

「ほう」

トトカの目が輝く。

「僅かの間しか接していないが、王女は人を惹き付ける人徳を持つ

ている。部下達は彼女の盾になって死んだのではないか」

「見ていなくても分かるのか」

「推測でしかない。軍は戦いに非情でなければいけないと思う。

部下達が戦いもせず指揮官を守っているだけでは戦いにならない。

指揮官が部下を殺したようなものだ」

「余もそう思う。軍の部隊が王室親衛隊のような真似をしてしま

った。それがそもそもその間違いだったのだ」

トトカが玉座から立ち上がる。

衛兵以外の臣下の全てが跪く。

「皆！ 余はジジ・フラグの言を信じ、罰は与えない事とする」

広い部屋に声が響き、群臣が返事を返す。

トトカが視線をルルルに送る。

「ルルルよ」

「はい」

「今を以て、そなたから部隊の指揮権を剥奪する。余の機兵と兵を失った罪は軍法に照らせば死罪に当たる」

「……はい、覚悟しています」

「分かっているのか」

「死を賜るつもりで帰還しました。ですが、私はジジ・フラグに命を二つ借りています」

「命を借りただと」

「それを返さないことは恥だと思いました。この借りた命をどうやれば購えるのか分かりません。ジジ・フラグには格別の計らいをしていただきたい。陛下お願い致します」

「ルルルよ、わが娘よ。生き恥を晒せ、お前には死すら生温いのだ。生きて6人の部下の死を背負え」

「背負います。彼らは私が無能なために死んだのですから」

ルルルは跪いたまま顔を上げなかった。

僅かに嗚咽だけが聞えた。

ジジはミラージユを返還してもらったために軍の整備ガレージにや
ってきた。

「あなた地上人でしょ？」

到着するなり、少女が駆け寄ってきた。

栗色の髪を三つ編みにした幼い少女だった。

「ジジ・フラグだ」

地上の流儀で敬礼した。

動作が体に染み付いているので、淀みなくすることが出来た。

「私はラン・アーヴィン」

ランの後ろに中年の男が付き従うように立っている。

男には左腕が肩から無かった。

「従者のガワン・カーワンです」

ガワンは目礼をするだけだった。

穏やかな眼光の中には、値踏みするような動きがあった。

「お前は変わった地上人ですね。行き当たりでお姉さまを助けた

と聞きました」

「運でしょう」

「運ではない」

ガワンが表情を変えずに言った。

「謙遜しなくて良い。過ぎたことだが、戦況を分析した。相手

は手練7機だった。それを一瞬で撃破する事を運とは言わない。

お前は優秀な戦士なのだろう。今こうして相対し、この男なら

やるのだろうと思った」

「ガワンは王国でも屈指の実力者なのです」

「何の実力者かは聞かない。聞けば隙を見せることになるだろう

し」

「？」

「姫様、ジジ・フラグは、与えられる情報を鵜呑みにしない。そう申しているのです」

「まあ、拗ねた考え方ですね。それに人からの賞賛は素直に喜ぶものですよ、ジジ」
拗ねている。

確かにそうだと思った。

「子供の方がよく見える。　純粋な拗ね方ではないからな」
ガワンお前もだ。

ただ純粋な拗ね方などと言わず、可愛げがないと言えはいい。
言えば自分が本当に拗ねていると思った。

「ガワン。私は12歳になりました。　王族では結婚も許されま
す。私は大人一人前の機械整備もできるのですよ」

「いいな。俺はそういう物言いは好きだ。一人前の仕事は出来
るといふ事が特にな」

「見せてあげますよ。　いまから分解作業を行うところですから」
ポケットの中の携帯モジュールが振動する。

二人に会釈をして、画面を見る。

「機密保持に重大な危機発生」

「……ラン、君が解体しようとしているのは、俺の機体じゃないの
か？」

「はい。元に戻すので大丈夫ですよ」

ランが弾けるような笑顔で言う。

こんな輝きに出会う事は久しぶりだった。

「わかった」

「良いのか」

ガワンが言う。

「ランは大人一人前の仕事が出来のだろう。　ならば自ら結んだ
約束は守るといふことだ」

「そういう考え方もあるな」

「マシンの心配もしたいが、明日からの住処と食事の心配のほうが

先に立った。 案外現金な男なんだよ俺は」

「食事は大丈夫ですが、住居ですか」

ランが思案する

「総務に話を通すのは面倒だなあ」

生活は何とかかなりそうだった。

うまくいけば、機体整備もできるかもしれない。

ランとミラージユの整備の約束を結び、機体を倉庫のハンガーに収める。

この機体のAIは最後まで命令に承服しようとしなかった。

通常の操縦方法に加え音声入力による操縦方法を追加したため、とことどころこのAIは人間くさい反応をする。

操縦者に対して反抗するようなAIではあるが、今までの教育によって機体の制御関係はAI側でほとんど行う事ができるし上、モーションセレクトの煩雑さも軽減された。

副操縦士を搭乗させる重量以上の働きをしているのでこのAIを下ろす気は無かった。

まずAIに今の現状が異世界に召喚されてしまった事と満足な補給を受けられるか未知数である事を説いた。

AIはしばらく思考すると、ランによる整備を承服した。

整備をするとはいつても、作業者であるランが地上のPTに対する知識が無いので、木箱を机に簡単な講義を始めた。

ランが地上から流出したかなり古いパソコンを所持していたので、それとミラージユの携帯デバイスを接続した。

ミラージユ側でパソコンをハッキングして機能を掌握すると、古ぼけたブラウン管の画面にミラージユの概要図が映し出された。

「ラン！ 何を勝手に話を進めている」

ガレージの中にルルルが取り巻きの兵士と共に現れた。

「お姉さま。 ご無事で何よりです。 地上語の翻訳が出来て

いなければ、解体なんてしませんよ」

「ルルルか。OSやプログラムは別言語だと思ってくれ。金属疲労や損傷した箇所を手探りで探していく。AIの自己診断ほどザル診断はないからな」

携帯デバイスからAIの非難めいたブザー音が発信される。

二人はルルルを無視して会話を進める。

「損耗率の高い箇所とありますか」

「……そうだな」

キーボードを叩き、画面に損耗度の高い箇所を表示させていく。

「姉を無視するな」

ルルルがランの頬をひねり上げる、

「お姉ひやま痛いれす。ミラージユの整備研究計画を立てているところなのに」

ランの抵抗はまるで意味は無く、背後から頬を弄ばれる。

「お前は空気を読まない女だな」

ジジは講義の腰を折られ、不機嫌な態度を隠さなかった。

「ク……ジジ・フラグお前には借りを返してから言いたいことを言う。ラン！お前は総務課でくだぐだと手続きをしおって」

「そうしないと色々とまずいですから」

「時間の無駄だ。ジジ・フラグは、このルルル・アーヴィンの客分だ。そう言えば簡単に済むのだ」

ルルルが得意げに胸を反らす。

会った時からうかつな少女だと思っていたが、改めてこれが王族だとジジは思った。

「貴様が姫様に無礼を働いた地上人か」

取り巻きの兵士がジジに対する敵意を露に言う。

「イネス殿、私はジジ・フラグに倒された。助けられた事は命を借りただけだと思っている」

「おいイネスとか言ったな。喧嘩腰で喋るのは許してやる。ま
ず名乗れ」

「イネス・ドーナンだ」

「俺はジジ・フラグ。やるんだろ？」
肩をすかして薄ら笑いを見せてやった。

「……貴様っ」

「腰に下げている剣は飾りか？」

安い挑発だったが効果は覲面だった。

イネスが右手で剣の柄を握る。

その刹那、ジジはイネスに正面に立った。

「つち！」

イネスが跳び退る。

体は後ろに下がったのだが、剣を握る右手をジジの手が握り締めていた。

「動かない、と?!」

イネスの右手は空間に固着したようにその場から引き抜くことが出来ない。

掴まれた右腕ごと引き寄せられ、イネスは背負われて宙を飛んだ。

イネスは硬い地面に背中から叩きつけられ、絶息し、のたうち回る。

口からは潰れたような呻き声が漏れる。

苦しげに這い回るイネスにジジが覆いかぶさる。

首に腕が回り、そのまま締め上げられる。

イネスはそのまま気を失った。

「殺したのですか」

ルルルが蒼ざめて言った。

「すぐに戻す」

ジジがイネスの背中を強く押す。

イネスが咳き込みながら、大きな呼吸を何度も繰り返す。

「お前は一度死んだ」

「死んだだと？」

イネスが思案する。

次第に顔が紅潮し、わなわなと肩が震える。

平手が顔を弾いた。

じんとした痛みが頬に残る。

イネスの目は燃え上がっているようだった。

こういう目は嫌いじゃなかった。

手痛い敗北を喫しながら、内に秘めた闘志は全く萎えていない。

「とことん相手をしてやる」

「ジジ・フラグ、次は機兵だ。機兵乗りは機兵の強さが大事なのだ」

イネスが大股歩きで去っていった。

「すまぬ。イネス殿は私の師匠の様な方なのだ。今から説き伏せてくるので待っていてくれ」

「さて、ミラージュの代わりに機体を用意できるか」

「本気で戦うのか」

ルルルが言う。

「俺は無駄な争いが嫌いだ。地上人の戦の仕様を見せてやれば戦闘力の差が分かるだろう」

ラ・ギアス人にも血の気の多い輩は居るようで、一々その者たちと腕比べをしていたのではきりが無い。

序列を分からせて、それでも納得のいかない者を叩き伏せればよいのだ。

「言いくいのだが、弟子の私ですらあの程度だった。そなたのミラージュで戦ったとしたら決着は火を見るより明らかではないか」

「ミラージュの整備はランとの約束だ。違える事はできない。そうだろうか？」

「それはそうだが……」

「私で融通できる機体はブローウェルくらいですよ」
ランが言う。

「しかも非正規品のな」

「はい、お姉さまの仰る通りです。他の機体の余剰パーツやスクラップを利用していますし、最も不安な要素は私が精霊契約を施術したことです。本来大地系の精霊と契約を交わした魔装機は、土精の加護で装甲の強度が向上したりするのですが、私の組み上げたブローウエルにはそういった能力向上もありません。機装兵と変わらないような性能なのですよ」

「手抜きをして組んだわけではないのだから？」

「当たり前です」

ランが胸を反らせて言う。

「問題ない」

ジジは魔装機兵ブローウエルは簡単な講義を受けただけで動かす事ができた。

そもそもルルルのような少女が簡単に操縦できるのだから、PTのような難易度の高い操縦方法ではなかった。

魔装機兵にはニューロンセンサーという制御システムが組み込まれている。

それは人間の「感覚」に相当するため、搭乗者と同調させる事で機体を動かせるようになる。

「さつき教えた通り、制御盤を握ってみよ」

ルルルはスピーカーを使い、開放されたブローウエルのコクピットの中のジジに命令する。

「ああ」

ブローウエルが乗降姿勢から立ち上がる。

「思い浮かべた動作をなぞる。便利だが過敏すぎるインターフェイスだ」

ブローウエルが屈伸をしてひざを伸ばす。

腰を落とすたびに両肩の長大なレールガンの重量に振り回される。

機体がパイロットの思い通りに動く事は便利だった。PTやAMのように自動制御と手動操作が複雑に入り混じったインターフェ

イスは、パイロットに長い習熟期間を課す。この精神感応操作というものは体を動かすように操作する事ができるので、初心者でもすぐに動かすことができた。

つまり、機兵そのものを人体の延長として想像し、動かすという想像力が重要となる。

「どこまでできるものか」

下段から上段蹴りへの連携させる。

ブローウエルの巨体が空を尻ぎ、突風が機材を揺らす。

両肩の砲に振り回されて、体が前方へ流される。

「ラン！ 両肩の砲は外せるか？」

「ワイヤーで吊ってから外します」

ランが叫ぶように言った。

ブローウエルの今の動作で埃を被ってしまったようだった。

「時間はかかるか？」

「砲の排除は、ブローウエル側で操作できます。左右の青いレバ

ーです」

「ジジ……正気か？ブローウエルで白兵戦をするのか」

「そうだ」

「5分後にワイヤー掛け始めます」

「ハッチ閉じるぞ」

見渡す限り草原が広がる。

二機の機兵が対峙し、その足元にはジジとイネスが立っていた。

「始めようか」

ジジが言った。

「……砲無しのブローウエルか」

イネスが見上げて言う。

ブローウエルには主兵装であるリアレールガンが外され、接続部分には装甲板が取り付けられていた。

「模擬弾の殺し合いが嫌いだな」

ジジが嘯く。

イネスが挑発で顔を真っ赤にする。

「貴様……全力で叩き潰す」

イネスが言い放ち、二人は機兵へと搭乗していった。

待機状態だった2機が戦闘出力へと切り替わり、互いの距離を開ける。

100メートルほど距離が開き、互いに静止し、プラズマサーベルを構える。

ギルドーラ？は半身で、目の位置でサーベルを構え、刺突の構えだった。

ブローウエルは両手にプラズマサーベルを握り、腕は下げたままだった。

ギルドーラ？がブースターを吹かしながら一気に肉薄する。

ブローウエルが走り出す。

両手に握ったプラズマサーベルは発信させていない。

二機が一瞬交錯し、サーベルが火花を散らす。

ブローウエルが反転し、粉塵を巻き上げながら大地を滑る。

『土煙で身を隠すか。ギルドーラから逃げられるかよ。速度が

違うんだよ。』

煙幕を突き抜けようとするギルドーラに、土煙の底からブローウェルが爆ぜるように大地を蹴る。

二度目の交錯。

ギルドーラが咄嗟に斬撃をプラズマサーベルで受ける。

ギルドーラが後方に弾かれる。

(この力感がブローウェルなのか?)

イネスは思わずうなった。

機体重量の軽くなったブローウェルになら力負けはしないだろうと思っていたからだ。

イネスは操作盤のホイールを動かし、機体状況を確認する。

自己診断システムは異状無しを告げている。

目視で四肢の拳動を確認する。

左腕の反応に、僅かだがタイムラグがある。

今の衝撃で神経系がフレームに圧迫されているのかもしれない。

土煙が晴れる。

大地から塵気楼のように立ち上るマナが、ブローウェルに集まり、装甲の隙間から虹色の燐光が溢れていた。

精霊による陣地形成それがブローウェルの霊的優位を引き起こしていた。

あの機体の契約地は、ラングラン王国ではなく、このサザ公国。

ここはブローウェルの精霊の支配地域だったのか。

C級魔装機兵は、どこにでもありふれた低位の精霊と契約している。しかし優位な地形による能力修正が行われればB級魔装機とも遜色ない。

ましてその精霊の生まれた地ならば、魔装機兵の能力補正は魔装機神に迫るはずだ。

そもそも精霊の能力が高まれば、操者にはそれなりの適性が求められるはずだし、陣地形成など初心者にはできない事ではないのだ。

(もしや聖戦士・・・だともいうのか)

目の前の敵はおとぎ話から現れたような人物だともいうのだろうか。

イネスの嫌な予感は拭えなかった。

「さて……ね」

ジジは操作盤に思惟をこめながら操作している。

ブローウエルが思わぬ力を発揮し、想像の動作よりも力が入りすぎている。

機動力の無さを誤魔化すために、鏢迫り合いに持ち込もうとしたが、押し付ける強さが余りにも強すぎて、相手を弾いてしまった。

得体の知れない力に助けられている。

まさか機体に振り回されるとは思わなかった。

今ジジの背中には冷や汗が流れていた。

ガレージでの操作と演習場での操作の感覚が違いすぎたのだ。

「これが魔装機兵というものか……」

モニターに現れる言語はまるで読むことができなかった。

だが、今の状態がまずいことだけは分かった。

機体強度以上の機動をしている。

足首周りの反応が鈍い。

何かに取り憑かれたように操縦していれば、多分……まず足回りにガタがくる。

これがゲシユペンストなら、ホバーやブースターで機動をアシストするのだが、ブローウエルにそんな機能は搭載されていない。

何よりコクピットにまで虹色の燐光が溢れ出している。

ヘッドギアのスปีカーからはランのはしゃぐ様な声が聞えてくる。陣地形成。

精霊の靈的優位。

この二つの単語を繰り返すのだが、まるで意味を想像できない。

彼女は自分の組み上げた機体が思わぬ活躍をしているので、それに

喜んでいるのだという事は分かった。

「しかし…まるで役に立たないオペレーターだ」

操作盤を握る。

拳動をイメージする。

重心を低く、重く、駿馬のように駆けなくていい。

完全に土煙が晴れ、対峙が続く。

ギルドーラ？が僅かに退く。

正面の斬り合いは、力押しで通されると悟ったのだろう。

ギルドーラ？がブースターの出力を上げながら馳せ違ふ。

掠めるようにサーベル同士が火花を散らした。

再び2機の距離が開く。

ブローウエルは腰を低くしたまま双剣を防御に構える。

ブローウエルの腰が更に低くなる。

じりじりと足が開く。

対峙が続く、ブローウエルの構えがゆっくりと攻撃的なものへと変貌していった。

腰が深く沈み、足が開かれた構えには、猫科の猛獣の様なしなやかさがあつた。

断固とした必殺の気を発している。

ギルドーラ？が操者であるイネスの意図を感じ取り、わずかにたじろいだ。

本来ならば機動力で攪乱し、長期戦を計るはずだったが。

しかし生半な覚悟で刃圈に触れれば、手痛い逆襲を予想させた。

いつまでも対峙は続かない。

ブローウエルは今まさに臨界点を迎えようとしている。

意を決するしかない。

イネスは臍を決めた。

ギルドーラ？を100メートルほど浮上させ、プラズマサーベルを突き出すように構える。

高所から最大加速し、接触の直前、感じるままに太刀筋を決める。

刀身の切っ先に全てを籠めてくれる。

頭の中からは互いの生死の結末は消え去った。

更に対峙が続く。

僅かにブローウエルの双剣がゆれる。

先に動いたのはイネスだった、

ギルドーラ？のブースターが爆ぜる。

限界まで燃焼させた推進剤が、機体を音速に載せる。

まだブローウエルは動かない。

まさに2機がしようとしたその時、ギルドーラ？のサーベルの軌道が振り下ろすように変わる。

ブローウエルの双剣がギルドーラ？の振り下ろしを防ぐ。

周囲に火花と烈風が走る。

ブローウエルの関節から虹色の燐光が漏れ出す。

貯められた力が爆発するようにブローウエルが大地を蹴り、双剣を薙ぎ払った。

ギルドーラ？は強引に太刀筋を変えられ、その切っ先には誰も居ない。

十二分に加速した機体はブローウエルという支えを失い、強かに地面に激突し、地面を転がる。

それが決着だった。

ガレージには見物していた兵が集まっていた。

「お前は負けた。二度も」

「……そうだ。わたしの負けだ」

「お前達、兵士の命は国王の物だ。それを二度も勝手に使った……首を出せ、お前の様な自分勝手な指揮官は無駄に兵を殺す」
イネスの腰に差している剣を捨てる。

「こんな座興のようなことで死罪など」

「座興？ 二度の真剣勝負だったのだ。 お前の師匠にしてこの程度なのだ。 弟子であるお前の甘い認識は許してやる」

「言い過ぎではないのか！」

ルルルがイネスを庇いながら叫ぶ、

「お前の失態は師の弱さが招いた。 弱い女が戦場でどうなるか分かっているのか」

「そんな事を」

ジジはルルルの目を見据える。

ルルルは言葉を繋げる事ができなかった。

「死など生易しい陵辱が待つだけだ」

ルルルが息を呑む。

やはりこの少女は戦争の醜さを知らないまま兵士となっているのだ。

「その通りだ。 ジジ・フラグ・・・ 私は姫様に戦の厳しさを教えられなかった。 今私の心は死んでいった兵の重さで張り裂け

そうだ。 終わりにしてくれ」

イネスが跪いて首を下げる

全ての人間が息を呑んだ。

「ルルル、お前の剣を」

ルルルは青ざめた顔をしたまま首を振る。

「姫様・・・剣を」

イネスが言った

ルルルの視線が泳いだまま、剣が差し出される。

剣を握り、イネスの髪を掴み上げる。

「っ！」

気合と共に剣が一閃する。

ジジの手にはイネスの長い髪束が握られていた。

首はそのままだった。

イネスの肩が震え、そのわななきが全身に広がった。

「張り裂けた心のまま生きてみる。 今のお前に死は救いでしかない。 もっと恥辱にまみれるのだな」

「殺せ！私を殺せ。 騎士の誇りを……」
イネスが絶叫する。

最後は慟哭が混じり言葉にならないものだった。

「ルルル、これを死んだ者たちに供えろ」

切り落されたイネスの髪の毛の束を渡す。

「はい」

ルルルはイネスの髪の毛の束を握る。

「こんな男だジジ・フラグとは。 女が戦場に立つというだけで、心の古傷を触られ、誰かを傷つけてしまう。 そんな情けない男なのだ」

「いや、私はそうは思わない。 私の砕けた心に、あなたの言葉がとても染み入った。 何が？とは上手く言えない。 それでも私達が強がって覆い隠そうとした恥部を晒してくれた。 今思えば隠そうとしたことそのことが恥ずべきことだった。 あなたのおかげで私は死んだ部下の事実に向き合うことが出来る」
ルルルが笑う。

砕けた心、その言葉が強く耳に残った。

#0「」の章のさいごに（機体解説）（前書き）

1章に登場した機体の解説となります。

#011の章のさいごに（機体解説）

ゲシュペンストMKIV・ミラージュ

> i30195—3851<

この機体の原型は量産型ゲシュペンストMKII・S型。テストドライブを搭載するために出力の高いエンジン（プラズマジエネレータ）を内蔵している量産型ゲシュペンストMKII・S型が選ばれた。

プラズマサーベル以外の固定武装を排除し、高機動と抜群の運動性を高い次元で実現している。余剰出力を利用して様々な高出力兵器を併用運用できる事が特徴として挙げられる。

この機体の高性能化に当たり、実戦投入まで少ないながら準備期間が存在し、搭乗者のジジ・フラグがモーションプログラムを深化、再構築した要因は大きい。

次世代機に求められるハイスペックを実現した本機であるが、その出力に見合った兵器が搭載されなかった不運がある。

短時間の任務を想定して装備された大型ビームサーベル（MB04）は高出力で長大なビームサーベルを形成する事が出来るが、その突破力と引き換えに最大出力時は使用時間3分、冷却時間1分（変動あり）という使い勝手の悪さが目立つ。加えて宇宙用なので地上で使用する場合はすぐに過加熱に陥る。

防御面ではヒュッケバイン系の目指した斥力場による防御を放棄し、積層ビームシールド（トライビームシールド）により同等の防御力を目指しているが、例に漏れず最大出力時は使用時間と冷却時間の

折り合いが悪い。反面三基のシールドを分割使用した場合は絶え間なくビームシールドを運用する事ができる。

軽視できない短所を持つ武装ではあるが、絶大な攻撃力と防御力を誇る。

運用する場面を間違わなければ、相手の斥力場ごと敵機を切断する事も可能である。

搭乗者であるジジ・フラグはその短所を補うために、冷却時間中の補助兵装としてD74オートショットガンを装備し、防御面では両手に手甲型のシールドを装備している。

最も操縦性を劣悪にしている高機動時の重力制御推進方式とジェット推進方式を併用した複雑な操作を理解しなければいけない。

(メリットとして別系統の推進方式なのでお互いに干渉し合わない、唐突に進行ベクトルを変更する場合テスラドライブのチャージ無しにジェット推進で変更する事ができる)

部分的に次世代機を凌ぐ性能を持っているが、武装やセッティングにより搭乗者の個性を大きく反映してしまう側面を持っている。隙の無い機体であるが、例に漏れず超・上級者向けの機体となっている。

・作者より

作劇の都合により銃器が装備されていませんが、導入部以前の戦闘で銃器を使い果たしたという演出のためです。

本機は接近戦闘用の機体ではないということを弁解しておきたいです。

ミラージュにしばらく銃器が装備されない事は、ラ・ギアスの銃器の管制用のシステムと地球側の管制用システムが違うという演出のためなのです。

手榴弾やダーツなど投擲するようなものは該当しませんが、銃自体が照準システムを持っているようになりニアレールガンの装備はアウトにしています。

#011の章のはじめに

あらすじ(1)

地上世界の戦士ジジ・フラグは地球上空・大気圏で小惑星落下を阻止するためにミラージュ「ゲシユペンストmk4」で戦闘を行った。戦闘は苛烈を極め、敵の総帥を撃墜し、小惑星に取り付いた。その時突如として戦場は光に覆われてしまった。ジジが意識を取り戻した時、ミラージュは謎の大地の上空を飛行していた。

偶然戦闘に巻き込まれ、サザ公国第一王女ルルル・アーヴィンを救い出し、ここが地球内部に存在する異世界ラ・ギアスであることを告げられる。

国王により王女救出の功績を認められるものの、地上人であるジジを不審に思うサザ公国の戦士イネス・ドーナに勝負を挑まれる。ジジは技量の差が大きく難なく勝利するものの、異世界でも戦いに巻き込まれていくのだった。

この章の登場人物

ジジ・フラグ

地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。

ラ・ギアス側の召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。

> i29967 — 3851 <

シャルロット・フラグ

サザ公国の建国功臣の末裔。謀略により家族を抹殺される。

ジジ・フラグに従者として下賜され、今は弟子となっている。

> i29970 — 3851 <

ガワン・カーワン
サザ公国の建国功臣の末裔。元親衛騎士団長だったがその職を辞している。

今はラン・アーヴィンの従者となっている。

ラン・アーヴィン

サザ公国第四王女。整備兵として従軍している。

カイン・カーワン

ガワンの長子。機兵のパイロット

クロ（刺客）

何者からか差し向けられた暗殺者

ジジ・フラグが異世界ラ・ギアスのサザ公国に召還され、一ヶ月が経過した。

ジジはムートン市の軍営のガレージでラン・アーヴィンと共にミラージュ「ゲシュペンストmkIV」の整備を行っていた。時計は午後2時を指していた。

ランは食堂へ遅い昼食を食べに行き、ジジもミラージュの足元で昼食を摂っているところだった。

弁当の包み紙を開き、中からサンドイッチを取り出す。

食事は手早く取れるよう、軽めにしていた。

二つ目を頬張っているとき、ガワン・カーワンが現れた。

ガワンの隻腕が敬礼をする。

ジジも敬礼を返す。

「今一息入れているところだ」

二人は硬いパイプ椅子に腰掛け、空箱を卓にして向き合った。

ポットに入っているコーヒーを出した。

痩せた香りにガワンの顔が渋る。

軍営のコーヒーなどたかが知れているのだ。

「ジジ・フラグ、お前には陛下から褒美が下賜されることとなった」

ガワンが平時より声を潜めながら喋る。

「俺は軍のガレージを間借りできるだけで十分だったんだが。 聞

こう。 何を下賜されるのだ」

「従僕一名と屋敷を下さる」

「困ったな。 相手が国王では軽々に断れない。 国王の遣いでや

ってきたんだから、飲ませる気なのだろう？」

「そうだ。 ガレージの隅で寝袋に入って夜を過ごすような生活は

やめろということだ」

「風雨は凌げ、食事も出る。 十分だ」

「……幾つになる」

「30くらいだ」

まだ熱いコーヒーを飲む。

不味い。

ただ苦く酸っぱいだけだった。

「傭兵という根無し草のままが良いのか？」

「死を傍らに抱いて生きてきた。家や生活など余計な荷物なただだ」

「もう少し人らしい営みの中で生きてみる。そのための家ではないか」

「俺は戦災孤児だったらしい。それを軍人に拾われ、兵士として育てられた。俺にとっては軍こそ人の営みで、仲間が兄弟であり、上官が父親だった」

「歪だなジジ・フラグは」

ガワンがため息を吐いた。

出されたコーヒーに初めて口を付けた。

一瞬間が歪み、一気に飲んだ。

「そう思うのなら放って置け」

「そうはいかない、従僕は連れてきた。これだけは受けてもらおう。若い女だ」

ガワンはにこりとも笑わない。

若い女という言葉がひどく耳に残った。

「……連れてきたな」

「ああ」

ガワンは俺が出した不味いコーヒーより、もっと不味い何かを飲ませようとしている。

それだけは確信に近かった。

連れてこられた者は質素な紺色のドレスを着た少女だった。

ジジの顔が渋くなる。

「どうしろと言うんだ？ 俺にあの少女を」

「下賜された物だ。妻にしようと思つたと好きにしる」

「……」

「それではいけないのか。男として抑えられないものはあるだろう」

ガワンの言葉にはまるで心が動かなかった。

それより少女の顔がまるで動じなかった事に僅かな驚きを覚えた。ジジはじつと少女を見た。

着ている物が質素なだけで、本人の持つ雰囲気はたおやかで、庶民のそれではない。

武家の女ならばもつと堂々としている。

貴人か。

まるで後ろ盾の無い地上人を貴人が頼るのか。

尋常ならざる生い立ちがあるだろうと思えた。

「本当の事を言え。俺はその娘を殺すぞ」

「……殺すか」

「褒賞を役人ではなくお前が授与している時点で、ただならぬ事情があると思つた。巻き込まれてやってもいい。しかし事情は全て話せ。この娘は俺の様な男に「殺す」と言われ、微動だにしないか。 いったい何を見たんだ」

「全ては話せない。話せるだけ話す」

「聞こう」

「この娘の名はシャルロット、その身に流るる尊い血のため、本名は伏せなければならぬ。事の発端は母親とさる人との間に起きた不義密通だった。密やかに二人は逢瀬を繰り返したようだったが、ある時この関係が、さる人の奥方に露見してしまった。大変嫉妬深い方なので、母親の事を許さなかった。とうとう刺客を差し向け、母親ばかりか家族全てを殺してしまったのだ。刺客は腕は立つものの、元々暗殺者ではなく母親だけを殺して去ろうとしたところを家族が次々と現れ、闘っているうちに血に酔って殺戮をってしまった」

「その生き残りが、この娘が」

「そうだ。この娘は兄弟のはらわたに隠され、生き残る事ができた」

「この世の地獄を見た。そんな言葉しかないな」

「この娘を受け取ってくれるな」

「いや。俺の様な男に預けるよりもお前の方が適任だろう。剣術でも教えてやればいい」

「この事件は表沙汰に出来ないことだ。一家が皆殺しにされた事となり、遺体ごと家は燃え尽きた。シャルロットは生きてはいけない人間だ。だからシャルロットはこれからも刺客から命を狙われ続ける。だが俺には守りきることが出来ない」

「お前は誇りを抱いて死ねばいい」

ジジが不敵に笑う。

「誇りなどこの娘の両親が死んだときに砕けた。私は友に降りかかる災厄を予見しながら、何もしなかった腰抜けだ。今の俺はただ生きていくだけで、死んでいる事と何ら変わらない」

「死に場所を失ったということか」

「ああ」

悪びれもせずガワンが頷いた。

目の前のこの男は表面上平静を装い正常なふりをしているが、心の荒廃は着々と進んでいるのだろう。

しかし心に大きな傷を負いながらも、聡明さを失ったわけではない。

一見してこの少女を手放す行為は逃避そのものだが、俺が失敗しようともその責任は誰にも波及する事はないという計算がある。

何より俺が何らかの後ろ盾を必要としている事を見通していた。

ガワン・カーワンという男は傷つきながらも決定的に壊れることができない。

打算で動く狡猾さを持つ男ではあるが、その悲しいほど強靱な精神には好感に近い感情を抱いてしまっていた。

「兵としてしか扱わない。それでいいか」
ガワンが頷く。

「シャルロット、今日からお前が世話をする、ジジ・フラグ殿だ」
「・・・シャルロットです」

「ジジ・フラグだ」
虚ろな目をしていた。

黒い瞳からは生きる事への絶望だけが感じられた。

「先に言っておく。ガワン殿はお前を生かしたいと思っているよ
うだが、俺はどうとも思わない」

シャルロットと視線が合うが、彼女は俺を見ていない。

死人の目だ。

はつきりとそう思えた。

「死にたいか」

シャルロットが頷く。

「死にたければ死ぬ。今なら名も無き者として葬ってやる」
シャルロットに短剣を渡す。

迷わずシャルロットは喉元に刃を当てる。

短剣を握った手は震えなかった。

「父と母は死ぬときどんな顔をしていた」

シャルロットの手元が止まった。

目が閉じられる。

「兄弟のはらわたは温かかったか」

シャルロットの体が一瞬震えた。

見開かれた目か宙を見上げ、視線が向けられた。

呼吸が乱れた事が見て取れた。

彼女の網膜では断末魔の光景が再生されているのだろう。

「目の前にいる虚ろな目をした死人に言っているだけだ。早く死
ね」

「邪魔しないでください」

シャルロットが言う。

今こそ。シャルロットが呼吸を整える。

「……仇を討ちたいのか」

シャルロットの目、暗い炎が灯っている。

深い絶望を組み伏せて、彼女の胸の内には怒りが渦巻いている。

「無理だな。お前のような娘は何もできない。呪詛を抱きながらここで朽ちるのだな」

形の良い唇がわなわなと震え出し、憎悪の表情へと変貌した。

「なんだその目は、不満か。ならばその短剣で俺を突き刺せ。ここだぞ」

ジジは胸の真ん中を指し示す。

シャルロットが短剣を構える。

それは短剣を突き出しただけの拙い構えだった。

「しっかり握れ、刃は肋骨に対して水平に構えろ」
構えられた刃が水平になる。

体ごとぶつかる様に心臓めがけて刃が迫る。

刃は皮膚を貫いたものの筋肉に遮られ、僅かに刺さるだけだった。

シャルロットが懸命に刃を押し込もうとするのだが、ただ刃先が滑るだけだった。

シャルロットを突き放す。

「非力だな。もう一度刺せ」

シャルロットの目には、もう何も無い。

ただ動揺し、僅かに血に塗れた刃先と傷口を何度も見返すだけだった。

一歩踏み出す。

シャルロットが下がる。

震えが膝から這い上がり、今では体が震えている。

「震えるな。震えていては死ぬ事も生きる事も選べない」
シャルロットの肩に触れる。

あまりにも華奢で折れそうな体だった。

思いがけない不幸を背負い、それでも生きなければならぬ。

そんな宿命を背負うにはあまりにもか弱い少女でしかなかった。

「もう。 生きたくない」

シャルロットが憔悴しきった声で言う。

どんな言葉も慰めにはならない。

喪失したことがある者だけが共感できることだった。

だが自分は慰めを言えるような器用さは持ち合わせていないのだ。
ぼつりと言葉が出た。

「俺にとっては生きる事そのものが闘いだった」

シャルロットが虚ろな目を向ける。

「本当だ。 軍歴がそろそろ20年を超えるが、俺は寄る辺無く世界を彷徨い、闘いしか知らない。 そんな男の行き先は戦場だけだった。 俺にはそこにしか居場所が無かった」

自分の事を喋っていた。

シャルロットが他人とは思えない境遇だから言っている。

ガワンが噛み締めるように無言で頷いた。

「戦場だからな、無造作に命が摘み取られていく。 俺にとって最初の仲間達の最後は、どれが誰のはらわたか分からないものだった。 それから何度も死域を彷徨う闘いを続けた。 死にそんな時、俺の心に棲んでいる逝った友は俺を呼んでいなかったよ。 幻影だと思っ」

「幻……影」

「その幻は俺の心が都合よく紡ぎ出しているにしか過ぎない。 本当の本当の本当に根限り駄目で、何もかもどうしようもない時はさ……逝っていいと思う。 お前は どうする？ お前の内に棲む家族は微笑んでいるか」

「……私は」

かすれる様な声だった。

唇が「闘う」そう告げた。

「俺の従者になるのだな」

「はい」

「これよりお前は、シャルロット・フラグを名乗れ。身上を聞かれても俺の身内と答えればいい。お前は这个世界に縁の無い地上人だ」

「はい」

胸の内には修羅を一人増やしてしまった、という後ろめたさがあった。

「これでいいのだ」

ガワンが宙を仰いでる。
表情は見えなかった。

その日はガワンとの話を終えると、シャルロットと供に下賜された家へと向かった。

その家はムートン市の軍営の傍6キロほどに在った。

その間二人が交わした言葉は、シャルロットの年齢の事だけだった。

シャルロットは15歳だった。

与えられた家は、退役した軍人の屋敷だった。

以前の住人は機兵部隊の将官だった。

その者が軍で働いたために立てられた屋敷であった。

外観こそ小さく質素であったが、屋敷の作りは頑丈そのものだった。

屋敷の中に入ると全ての部屋が清掃され、清められていた。

ガワンが住居として渡すために体裁を整えたのだと思う。

縁側に座り、小さな庭を眺める。

胸中にはほっとした安堵感があった。

このままルルの客分として生活する自分に我慢が出来なかったのだ。

情性のまま流されていたのでは、いつか自分を内側から壊したくなってしまう。

「俺の従者であるということは、弱くても務まらない。分かるな？」

「はい。ご主人様」

胸の奥を潰されような痛みだった。

従者として扱う事は決めたものの、この呼び方だけは嫌だった。

穢れない少女が口にしていい言葉ではないと思った。

「俺のことは、ジジ殿と呼べば良い」

「はい」

「朝昼夜の三度食事前に30分だけ調練を付けてやる」

「はい」

「死にたくなければ、抵抗することだ」

「死にますか？」

「ジジ・フラグの調練とはそういうものだと思え。今に分かる。

庭に下りて向き合え」

二人が縁側から降りて向かい合う。

「俺に触れてみる。それが今日の調練だ」

シャルロットが怪訝な顔をするが、すぐに元の無表情に戻る。

目の前に探ろうな手が伸びる。

一歩だけ前に進み、足を払う。

シャルロットの体が強かに地面に打ちつけられる。

「立て。もう一度だ」

シャルロットが立ち上がり、視線を低くしながら手を伸ばす。

伸ばした腕を引き寄せ、体制を崩したところで足を払う。

受身知らないシャルロットは、再び地面に叩きつけられる。

「立て」

ジジが表情を変えずに言う。

シャルロットが立ち上がる。

いい目だと思った。

修羅場を越えてきただけあって、痛みで心は折れない。

戦士には強靱な肉体と同様に強靱な魂が要る。

シャルロットが腰を落としながらにじり寄る。

体勢を崩されるから足を払われるのだと思ったようだった。

シャルロットが地面を蹴る。

目の前には何も無かった。

ジジは覆い被さるように背後に回り、両腕で首を絞めながら地面に押さえ込む。

シャルロットが息苦しさから、渾身の力で跳ね除けようとする。

首から両腕が外れ、暴れる両腕を捉え、そのまま彼女の襟で首を

絞める。

シャルロットは動かなくなった。

虚脱したシャルロットの半身を起こして、背中を押す。

蘇生したシャルロットが咳き込みながら大きく呼吸をする。

横たわるシャルロットの胸がふいこのように大きく上下する。

「起きろ。 もう一度だ」

シャルロットは立ち上がり、腰を低くしたまま動かない。

「動かなければ返し技は無いな。 俺から仕掛ける事を忘れるな」

ジジが構えずに歩み寄る。

シャルロットの両手が体を掴もうと伸びる。

最初のような曖昧な拳動ではない。

シャルロットの両手が払われる。

防御の無くなった体に拳が打ち込まれる。

シャルロットは地面に跪いた。

背中が大きく上下している。

シャルロットが立ち上がる。

同じやり取りを何度か繰り返し、地に伏せたシャルロットが立ち

上がる。

息も絶え絶えだった。

ジジが背中を向ける。

「30分だ」

シャルロットが構えを解く。

ジジが振り返りながら言う。

「調練が辛く、死にたくなったらいつでも言え。 すぐに殺してやる」

「言いません。 私は」

「今の自分の弱さをよく覚えておけ。 俺くらいの腕があればお前を30分で百度殺すことは苦ではないのだ」

「……はい」

「しかし……よく立ち上がった。 悲鳴も上げなかった。 女とは

思わず調練をつけられる」

「……」

シャルロットの目が大きく見開かれる。

何度か視線が泳ぎ、顔が伏せられた。

表情はよく分からない。

「おい、食事は作れるのか？」

「いいえ。作ったことはありません」

「……今日は一緒に作ってやる」

「作れるのですか」

「旨くはないぞ」

台所へ行き、食料庫を探すと一通りの道具と調味料らしきものと乾物、米、小麦粉、焼酎（らしき匂いにする蒸留酒）、木炭があった。

生鮮食品は無い。ガワンが用意したものは日持ちする食品と保存食だけだった。

この世界の調味料は分からないので、調味料の一つ一つを味見しながら確認する。

岩塩、砂糖、胡椒、粉唐辛子、魚醤、果実酢、他にはハーブや薬草を粉末にしたスパイスがあるのだが用途が分からなかった。

「この干し魚を干切れ」

シャルロットが渡された干し魚を干切る。

やはり手つきは危ない。

ジジは何も言わなかった。

鍋に並々と水を注ぎ、米を入れる。

その鍋をコンロに置く。

コンロの釜の中に適当に折った木炭を入れ、細かく砕いた木炭を紙で包む。

その紙袋にマッチで火を付け、釜の中に入れる。

釜の中がじわじわと燃え上がり、コンロが熱される。

後はじっくりと水を足しながら煮込むことで粥が出来上がる。

釜の中の炎を見つめる。

木炭が小さく爆ぜている。

しばらく待つていると鍋から泡が吹き出してきた。

「終わりました」

「晒しに包んで縛れ」

シャルロットがほぐした干し魚の身をさらしに包む。

晒しを鍋に沈め、熱されて減った分の水を更に足す。

「あとは適当に煮るだけだ」

「スープ……ですか」

「粥だ」

「カユ？」

「食えば分かる。ラ・ギアスにもある料理だとは思っただがな」

コンロの前に二人は椅子に座り、火をじつとみつめていた。

無言だった。

1時間も経つと、鍋の中は最初の半分くらいの量になっていた。

鍋からは魚の旨そうな匂いが立ち上っている。

晒しを取り出し、出汁の出た中身を別の小鍋移す。

焼酎と塩、砂糖を入れて味を調える。

粥を煮ている鍋を火力の弱い部分に移す。

コンロの釜に木炭を足す。

小鍋に魚醬と砂糖、粉唐辛子を入れる。

香ばしい匂いが台所に立ち昇る。

強火で水分を飛ばし、付け合せの佃煮のちゅうまものが出来上がる。

「食うぞ」

食卓に鍋を置き、粥を二人分の器に注ぐ。

ジジは何も言わずに粥を啜る。

このラ・ギアスでは夕食の前に祈りを捧げるが、ジジがやることは無かった。

この男には祈るべき神は居ないからだ。

「食え」

シャルロットが一さじ粥を飲み込む。
何度も粥をすくっては飲み込む。

「……とても、おいしいです」

「そうか。もっと食べ」

ジジは2杯目の粥を啜る。

「なぜ……おいしいのでしょうか？」

シャルロットの頬は濡れていた。

「私は、おいしい物を食べている自分を許せません」

「そうか」

ジジが器を置く。

「生きている事は浅ましい。どんな悲しみと屈託を抱えようと腹は減るし、食う物は旨い。それが生きている事だ」

シャルロットの頬は次々に溢れる涙で濡れていく。

どんな苦痛でも泣かないと思っていたが、こんな事で泣くのだと思った。

自分はこのような純粋な少女を修羅に仕立て上げようとしているのだ。

どうしようもない事なのだと思った。

屈託と一緒に粥を飲み込む。

「食べ。まだ死ねないのだろ」

「はい」

すぐに鍋の中身は空になった。

深い夜陰に包まれた屋敷の外に殺気がいくつかあった。肌を刺すような気配に目が覚める。

寝室に異状は無かった。

隣のベッドで眠るシャルロットも生きている。

「起きろ。音を立てずにベッドの下に隠れる」

シャルロットが目を覚まし、頷いた。

今から殺戮が起きようとしているのだと分かったようだ。

「しばらく隠れている。今のお前では足手まといだ」

シャルロットがベッドの下に隠れる。

困むような気配は夜の静けさに溶け込み、まるでそこに誰も居ないようだった。

錬度のまばらな10人くらいだな。

夜気にまぎれる衣擦れと呼吸から、漠然とそう思った。

シャルロットがガワンの庇護から外れた直後の襲撃、今まで彼女が暗殺者に監視されていたのだと確信した。

寝室の窓と扉に、僅かだが人の気配があった。

夜具を体から外し、足音を立てて歩き、扉のある壁を背にする。

廊下の気配が揺らぐ。

音を立てて鞘から剣を抜く。

扉が開き、黒い影が二つ躍り出る。

手には短剣を持っている。

すれ違うように刃を走らせる。

一人目の首筋から鮮血が噴出す。

二人目は背後から背中短剣を突こうとしていた。

振り向きざま、短剣を弾き、相手の胸に胸に刃を滑り込ませる。

男は短い悲鳴を上げ硬直した。

窓が破られ、長い銃身だけがジジの背中を狙う。

激しい発砲音と共に寝室に散弾がばら撒かれる。

周囲に埃と煙が立ち上る。

続けざまに4発撃ち込まれた。

ジジは死んだ男の体を盾していた。

体には傷一つ無い。

破られた窓から人影が二つ、制圧したであろう室内を覗く。

同時に彼らの額には短剣が突き立っていた。

ジジは人影を察知すると同時に、奪った短剣を投擲していたのだ。

窓から先に襲撃されていたら死は免れなかった。

機先を制し、僅かな安堵と共にジジは埃に塗れた顔を拭った。

今の自分の装備には散弾に対する防衛の術は無かったし、致命傷を受けたまま扉の外の敵は撃退できなかった。

物音を立てて扉の襲撃者を待ったのは賭けだった。

眠っていて脅威の無いはずの対象が、起きていることが彼らの判断を狂わせたのだろう。

窓の外に出て、襲撃者の銃と弾薬を奪う。

形状からショットガンということが分かった。

軍用のコンバットショットガンというよりは狩猟用の猟銃に似ている。

構造は地上の物と何ら変わりなく、チューブマガジンに四発のショットシェル（弾丸）を装填し、ポンプを引く。

襲撃者のリボルバーも奪う、装填されている弾丸と銃口から想定すると、地上ではマグナム弾を使用できる型のように思えた。

屋根から襲撃者達が現れる。

数は6人。

迷わずショットガンの銃口を屋根に向けて発砲する。

発砲音と共に屋根から二人が転げ落ちる。

一人は顔に散弾を受け、もう一人は胸を押さえている。

窓から寝室へ戻る。

天井からは銃弾が雨のように注がれる。

照準すらしていない弾丸はまるで当たらない。
弾薬の無駄だと思えた。
廊下へ出る。

外から二人が侵入し、発砲する。
小刻みに動き、的を絞らせないようにする。
相手が発砲する。

暴力的な風切り音が背後にすり抜けていく。
相手の照準が安定するのにあと二秒もかかるだろうか。
ショットガンのトリガーを引く。

銃口から弾き出された散弾は狭い廊下での威力は十分すぎた。
散弾は襲撃者の全身にばら撒かれ、致命傷を与える。
倒れ悶える襲撃者達に腰に差したりボルバーの銃口を向ける。
撃鉄を引き、二度発砲する。

弾丸は頭部を粉碎した。

「一気に片付けるか」
台所へ向かう。

食料庫の扉を開け、大きな小麦粉の袋を破る。

20キ口程あつた中身を何度も宙に放り投げるようにばら撒く。

台所が白い煙に包まれる

台所に足音が三つ近づく。

ジジは音を立てずに勝手口からそつと外に出る。

窓の位置を確認する。

台所の扉が開く気配は無い。

入り口の扉で粉塵が晴れるのを待つか考えているのだろうか。

「鈍い」

台所の窓に向かってショットガンを二発撃ち込む。

激しい轟音と共に台所が爆発する。

ジジの撒いた小麦粉の粉塵と酸素が混合され、ショットガンの弾
が室内に入った時の摩擦で粉塵爆発を引き起こしていた。

ジジは素早く台所に入ると、扉に向かった。

三人の襲撃者が顔を抑えてのた打ち回っていた。ジジはショットガンのトリガーを二度引いた。銃口から吐き出された散弾が彼らを絶命させる。あと一人残っていたはずだ。

ジジは弾切れになったショットガンを捨て、リボルバーを握った。

庭に出ると、黒づくめの男が立っていた。

「やるな」

男が言う。

穏やかな佇まいだったが、気力は充溢し、視線に抜け目は無かった。

「初手で退くべきだった」

「今にしてみればそう思う。心のどこかで数を頼みにしてしまった」

「だと思った。戦い方に工夫が無い」

「辛辣だな」

「襲撃だけが暗殺の全てではない。もっと日常の営みの中で殺すやり方もあったはずだ」

「こればかりは、依頼人のオーダーでな」

「依頼人とは」

「言えないな」

男が低く笑っている。

笑い声は乾いていたが、声色が明るかった。

少女を一方的に鬨り殺す嫌な仕事に、思わぬ獲物が居たといったところだろう。

「この男が私の家族を殺しました」

縁側にシャルロットが立っていた。

「リーゼロッテ様」

「この少女はシャルロットという、地上人だ。そういう事にして

いる」

「この少女を匿うか。可愛げな容貌をしているが、この娘がもたらすものは破滅ということをつ分かっていなかったな」

「分かっていないだろうな」

ジジの冷静を装う胸中に、はつきりと怒りが燃え上がった。

誰が好き好んで報復者への道を歩むものか、シャルロットにも人並みの幸せがあつたはずなのだ。

心の傷を埋める間も無く、名を隠し地上人の従者をやらされていく。

ほんの少しの喜びに涙する今の姿は、無残としか言いようが無かつた。

「生きて依頼人に会えれば言つてやれ」

「聞こう」

「貴様の首はシャルロット・フラグが打つ事となるだろう。とな」

「……私が」

離れたシャルロットの視線に動揺があつた。

「嫌か？」

「討ちます。私が」

シャルロットがはつきりと言つた。

握つた拳がわなないていた。

「待て。……貴様の名は」

「俺か。俺は地上人のジジ・フラグだ」

「ジジ・フラグ、誰に弓を引くのか分かつているのか」

名前を出せない地位に居る人物、ジジの予想は当たっていた。

「人の貴賤が背負つた罪を軽くするとも思ふのか？ その思い

上がりに俺達が鉄槌を下すまでだ」

男が口を開いたまま「鉄槌か……確かな」と呟いた。

「そういつた痺れる言葉を久しく聞かなかつた。俺の事は「黒」

とでも呼ぶがいい」

「暗殺者が名乗るのか」

「ただの男として、貴様とは闘おう」

「始めるぞ……黒」

「こい。ジジ・フラグ」

黒は短剣を逆手に持ち、半身だけを相手に向け、体で短剣を隠していた。

黒が短剣を抜いたとき、刀身が見えたが、はっきりとした長さが分からなかった。

得物が短剣というだけでは相手の間合いが読めない。

こちらの持つ剣より遙かに間合いの短い短剣では間合いで不利なはずで、それでも短剣を遣うということは、必殺の工夫を凝らしていると思えた。

ジジは腰に差したままのリボルバーを抜く、撃鉄は既に起こしてあった。

ジジは左手だけで照準をし、引き金を引いた。

三度発砲音が続く、黒は弾道を読んで僅かに動いて避けていた。

残弾は一発。

再び場が膠着する。

予想通りだった。

黒の体捌きは俊敏で、それに絶対の自信を持つが故の武器選択だったのだ。

刃を合わせることなく相手を切り抜ける技を持っている。

短剣に毒を塗っているかは分からないが、殺傷能力を高めるために塗っていることは十分考えられた。

じりじりとした空気の中、二人は少しずつ間合いを詰める。

二人の距離が3メートル程になったとき、ジジが両手から武器を捨てた。

こぼれ落ちたりリボルバーが暴発し、黒の頬を掠める。

黒の表情は動かない。

黒には最初の対峙の頃のような武器を変更する余裕は無かった。

「黒、ここまできたらやるしかねえよな」

「……やるぞ」

黒が呟く。

黒の体が沈み、低く跳躍する。

ジジは黒の腕を掴んでいた。

黒が背後に跳ぶ事は無いと思っていた。

同時にここまで膠着しては、すれ違いざまに斬り付けるしか手は無だろうと思った。

読まれている手だけに避けられる事も考慮し、そのまま通り抜けると確信した。

間合いさえ開けば銃器で先制できるからだ。

黒が掴んだ腕を短剣で切り払う。

短剣を握る手を掴み、ジジがそれを防いだ。

互いに押し合う力が拮抗する。

「ぐっ」

黒から苦悶の声が漏れる。

短剣を握った指の数本が潰れるように折られたのだ。

黒が左手を振り払い、押し込む右手に手を重ねる。

刀身はまるでその場に固着したように動かない、それどころか黒の力は押し返されていた。

ジジに向けられていた切っ先が次第に自分に向けられる。

黒は短剣ごと右手を握られ、手を離すことが出来ない。

ゆっくりと切っ先が黒の胸に突き刺さり、胸骨を砕く。

口角から泡を吹きながら、必死に抵抗するが、刀身の全てが胸に押し込まれた。

黒の体が虚脱し、口から大量の血を吐く。

ジジの顔が真っ赤に染まる。

ジジが黒の胸から短剣を引き抜く。

黒は目を開けたまま立っていた。

表情は穏やかだった。

「根限り……」

ぽつりと掠れた声で黒が言った。

「ああ。 やったよお前は、根限り」
黒が頷く。

瞳から光が失せ、黒が地面に倒れた。

カイン・カーワンにとって三年ぶりの帰郷だった。

ケナブ市の生家の佇まいは、住んでいた頃より色褪せていた。

門前で帰郷を告げると、出迎えた使用人が平伏し、父のガワン・

カーワンが待つ居間へと通された。

久しぶりの父だった。

やはり左腕は無い。

父が朗らかな顔で笑い、残った右手で握手し、抱擁を交わした。

「父上が家に居られるとは珍しいですね」

「お前が戻ってくるので、ラン様に休みを頂いたのだ」

「恐れ入ります」

今この家には誰も住んでいない。

自分が帰郷するために父が使用人を雇い、家の手入れをさせていたのだろう。

母親が病没してから、お互い家を空けるようになった。

それは母親が生きていた頃の暖かい空気を避けているようだった。

「国境の軍にも都に地上人が召還された。との噂を聞きました」

「ああ」

「その人物が、ルルル姫様に召還され、窮地を救ったなどと・・・

出来すぎた話だと思いました」

「事実だ。精兵のアゲイド7機を瞬く間に斬り伏せた。興味があ

ればラン様から記録を見せてもらおうと良い」

「たった一機で斬り伏せたのですか？」

「時間にして1分も掛かっていない。闘いそのものは止まってい

る棒を打つように容易いものに見える」

「その地上人を父上なら倒せますか」

「難しいな」

父の回答に逡巡は無かった。

「サザ公国にこの人在りと言われた父上ですら」

「お前はまだまだ若いな。男の価値が力そのものであるという考え方は幼いとも言える。人は思わぬ長所を武器にする者も居るのだから」

「はい」

短く答えると父は頷いた。

「そうだな……まずお前の疑問に答えると、戦闘力だけならば私を含めて同等かそれ以上の人物は数人居るだろう」

父が数えるように指を折り、宙を見上げる。

六人……。

それも戦闘力と限定した想定である。

「戦争や闘争といった状況となると話は別だ。ジジ・フラグは2週間前に暗殺者に襲撃され、その刺客全てを殺している。私が驚いたのは、その時の戦闘だ。刺客の武器を奪うこともさることながら、粉塵爆発を利用して刺客を葬ったことだ」

「鉱山など起きる事故の爆発だと思いましたが」

「それをあの男は、ばら撒いた小麦粉と酸素を燃焼させることで引き起こしたのだ。炭粉の爆発よりは威力は落ちるのだが、瞬間的に燃焼した粉塵は眼球や肺を重度の熱傷にする。対人兵器としては十分すぎる威力だろう」

「……戦いとしては邪道ではないですか」

「そうだ。だがあの男は正統な戦いを知らないわけではない。軍歴の10年を正規軍で、次の10年を流浪の傭兵として過ごしている男なのだ」

「あの男は幾つかから軍人なのですか」

「10の頃には従軍していたらしい。戦場で軍人に拾われたことがきっかけだったようだ」

「居るのですね。こんな男が」

「あの男を万能と思わないことだ。故郷を持たない故に、一つ所に留まらず、平和にも馴染まない。傑出した能力を持っていても、

守るべき者を持たない軍人は存在価値が無い」

「それでも父上はあの男を軽蔑していない。そのように聞こえます」

「そうだな。私もあの男のように思うさま闘ってみたいと思う。

違うな、闘っていればという後悔だ……」

「ターナー家の事ですか」

「そうだ。もしも闘っていれば。無二の友と命を失っても、誇りだけは守れたのだ」

父の両肩は何かに耐えるように、わなわなと震えている。

カーワン家とターナー家の親交は古く、父が準近衛騎士に任命されてから20年以上続いている。

ターナー家の当主であり、リーゼロッテの父親であるハノン・ターナは父にとつては朋友であつた。

母が存命の時には、年に2度家族でターナー家の屋敷に訪れる事を我が家の行事にしていた。

自分にとつても長兄ナーガと次兄ヤノンは剣友だつた。

ターナーの屋敷に訪れた時は兄弟二人を山に誘い、かなり過激な修行をしたことがあつた。

過ごした時間は長くなかつたがお互い通じ合うものがあり、あの兄弟とは結びつきが強かつたと思う。

父が残つた右拳を卓に乗せる。

余程力が籠っているのだろうか、卓がみしみしと軋みだした。

「だが、予感だけはあつたのだ。それも昔からだ。ターナー家にリベル殿が嫁いだ時から、不吉な予感はある。それでも、ターナー家は建国の功臣の一族だから大事には至らないと思ひ込んでいた」

父が苦悶するように目蓋を閉じた。

「そして今日に至つた。私は妻を喪い、お前は独り立ちをしていく。何の気兼ねなく闘うことが出来たはずだつた。その後悔だけが心で疼いている」

「しかし」

近衛騎士団長という肩書きを失った父に何が出来たというのか。あまりにも残酷な言葉が続きそうになってしまった。

「助かったリーゼは兄弟のはらわたに隠されて生き延びたのだ。心に癒し切れない傷を背負い、家名を隠して生きているのだ。」

ターナー家の娘がだ。建国功臣の一族が皆殺しされているのだ」

「ですが、公安や軍事警察が動いているのでしょうか？」

「この事を軍人が探ってはまずい。お前達軍人にとっては絶対的な権威を持つ相手を敵に回すことになる」

「それは一体なんですか」

「この国に忠誠を誓う限り、知ってはいけないことだ」

「……国家権力ですか」

二の句を遮るように、父が言葉を重ねる。

かなり語気は強い。

「よいか。ターナー家の凶事を他者へ問うことを禁ずる。お前が想像しているよりこの事件は重いのだ」

「わかりました。一つだけよろしいでしょうか」

父が頷いた。

「ターナー家・末妹リーゼロツテは誰が保護しているのですか？」

「ジジ・フラグに預けた」

顔面から血の気が引くのが分かった。

同時に心臓が大きく脈打ち、一気に血が熱くなった。

あの可憐な少女が地上の獣に預けられているのか……。

そう思えば、動揺をまるで隠せなかった。

「なんとということは今すぐ引き戻すべきです」

「私には暗殺者からあの娘を守る力は無い。お前にはあるのか」

父の言葉には一切の楽観的な想像はなかった。

刺客の襲撃を防ぐことを第一に考え、地上人ジジ・フラグに預けたのだろう。

その采配は的中し、刺客を退けているのだ。

「それは」

「やめておけ。 家族に続いて、お前まで命を失えば、リーゼの心は自責の念で更に引き裂かれる」

「自分が……死ぬと言いますか」

「納得いかないのだな」

「ジジ・フラグに会ってみる。 会えば分かる」

父はそう言うと言間から出て行った。

地上人がどのようなものか見てやろう。

胸中はその思いで占められていた。

ムートン市の軍営のガレージに6機の魔装機兵ガディフォルが搬入されていた。

その内1機の機体色は黒、外装は猛禽類を連想させたものから、突起や装飾を減らした鎧に変更されていた。

黒いガディフォルは、排除すれば機体性能を著しく損ねるパーツのみ残され、新たな装甲を付けた。

その姿から元の機体を連想することは難しくなっている。

カインは自分の搭乗機である黒いガディフォル「ガディフォル・レイ」の足元で、この機体の設計者であり、この国の王女であるラン・アーヴィンに敬礼した。

ランも敬礼を返す。

「操作感はどうですか」

ランが唐突に切り出してきた。

この人はいつもこんな感じだ。

自分の好奇心を優先するだけに邪念が無く、軍人にありがちなスレた所が無い。

「オリジナルより重いですが、装甲が厚くなった分被弾を気にしなくていいです」

「やっぱり重いのですね」

ランは三つ編みを弄りながら思案していた。

「機体重量の増加よりも、外装を変更したことによる精霊象徴の加護を失った事が影響していると思います」

「姿を変える事で術式を変更していますから。今のセッティングではガディフォルでは無い気がします」

「総合的にはオリジナルより遣い易いと思います。原機の想定している高機動戦闘に対して武装のレイアウト（配置）に難がありましたから。そこを改善していただいただけでも戦闘力は向上して

いると思います」

神聖ラングラン王国で設計されたガディフォールは、正魔装機兵ソルガディの機能の多くを簡略化したため、武装と機体性能の相性が非常に悪い。

その原因は劣悪な操作性と薄い装甲、加えて攻撃力不足が挙げられる。

特に高速戦闘時に使用できる武装は両翼のビームキャノン2門だけであり、威力の低さもさることながら、推進装置に直結しているため、機動によって射角が制限される。

最も致命的なのが、高速戦闘時に使用される精密射撃のプロプログラムの精度があまりに低い事だ。

そこでランが行った改修は、装甲強化と武装の配置変更である。

装甲が大量に追加され、重量が増加したことにより運動性は低下したが、元々C級魔装機兵とはいえ抜群の運動性を持っていたため問題は無かった。

両翼のビームキャノンは両腕に配置され、通常の射撃から、出力を制御したビームサーベルにまで使うことができる。

「ガディフォールの高速移動によるヒット・アンド・アウェイという戦術思想は有効であると思いますが、一人の兵士に要求される技量がネックです。現実的にオリジナルを使いこなせる兵士がラ・ギアスに何人居るでしょうか？」

「まだ、ラ・ギアス人には過ぎた機体ということですか」

地上人ならばどうなのか。

言葉になりそうな発言を飲み込む。

「姫様のブローウエルを操縦者が決まりましたか」

「どうしました突然」

「改修が進んでいるのが見て取れますので」

「最近召還された地上人の助言ですよ」

「エーテルジェットスラスタを増設して、両肩の砲を外しました」

「砲を？」

「代わりに大型ミサイルコンテナを二つ背負います」

「考えられているものだ。この機体の問題点であった機体重量と運動性を単純な方法で解決するとは……しかし改修もガディフォーはバゴニアとの開戦に間に合いますが、他の機体まで考えると」

「そんな弱気では地上人のジジ・フラグに怒られますよ」

「姫様は気に入っておられるのですか？」

「はい。でも最近は何となく嫌いです」

「何故？」

ランが暗い視線をガレージの外を走る少女へ向ける。

「リゼロツテ・ターナーが一人分はありそうな背嚢を背負って走っていた。」

「あの方は……」

「知っていますか」

「リゼロツテ・ターナー」

「指導だと分かっているけど、あの人被打れたり投げられたりするのを見るのは……嫌いです」

「まさか」

「気を失っても、蘇生させて何度も訓練を繰り返されるのですよ」

「止める者は」

「居ましたよ。全員やらねえましたけど」

ランが首をすくめる。

「強いのですね」

「戦いになると手が付けられません。虎に人が挑んでいるようなものです」

「それほど強い男がなぜ、リゼを痛めつけるのですか？」

「『ジジ・フラグの従者が弱くてはいけない』というのが彼の弁で、輪をかけるようにリゼロツテが、『ジジ・フラグを信じています』の一点張りです。そんな二人ですから訓練の厳しさが度を越していくのです」

「……壮絶としか言いようがありません。あのリゼが闘ってい

るといっただけで、私には信じられない」

カインは外で走るリーゼロッテを見つめた。

淀みなく、一定の動作で走る彼女がひどく歪に見えた。

ガレージの外、整地されていない草むらに一人の男が立っていた。体が大きく、眼光の鋭い男だった。

ラン王女に特徴を聞いていたのでその男が、ジジ・フラグという地上人だと分かった。

「カイン・カーワンと申します」

「ジジ・フラグだ。ランからお前のような男が来ると連絡を貰った」

互いに敬礼を交わす。

ジジの敬礼は穏やかで、敵意は無いように思えた。

「少し話をよろしいですか」

「聞くよ。大体見当は付くが」

「リーゼロッテ・ターナー殿の事です」

「知らないな。そんな人間は」

カインの心臓が大きく脈打った。

かつと血が熱く滾るようだった。

体の内に発する熱気を抑え、平静を装ったまま話を続ける。

「あなたの従者です」

「あれはシャルロット・フラグだ。国王様から従僕として下賜された」

「……従僕」

噛み締めるように呟いた。

ジジ・フラグの返答は現実を告げているだけだった。

その過酷な現実を当人に聞くまで受け入れていなかったのだ。

「文句があるか」

ジジ・フラグが抑揚の無い声で言う。

リーゼロッテを物の様に扱うこの男が許せなかった。

頭の中ではラン王女が言う、リーゼロッテがこの男に殴られている

るといふ言葉が何度も反響していた。

「地上人のあなたには分からないだろうが、リーゼの生家のターナー家はこのサザ公国建国の功臣の一族だ。この国の人間にとってそれは大きな意味を持っている。それをあなたは辱めているのだぞ」

ジジの表情は冷静そのものだった。

今まで遠くを見ていた視線が自分に向けられた。

「ふむ。そういうことか」

「何に納得しているのか」

「言えないな」

「貴様！」

「この事件は無視しろ」

頭に血が上っていたが、この男が父と同じ事を言っていることは分かった。

「無視できないから、こうしている」

「真実を知ったところで、到達するのは落胆だけだ」

「……謎掛けはやめてくれ。血の上った頭では腹が立つだけだ。」

真実とやらを知っているのか？

「功臣の一族が抹殺され、その生き残りの少女が、地上人の従僕として下賜される。これが普通にあり得る事かよ」

「ない・・・な」

「あり得ない事を動かす力学が働いている。ということだ」

今の言葉で激しい怒りに熱せられていた理性が急速に冷めていく。遠まわしに言っているが、その力学が政府や王家を想像させる事は十分だった。

「俺も推測でしかないのだ。早とちりをするな。事件の時期を

バゴニアとの開戦間近に重ねてきた事も考える」

「……」

息を吞んでしまった。

この地上人はリーゼロッテの生家「ターナー」家が、サザ公国の

海防に影響を与える力を持っている事を知っているのだろうか。

もしもターナー家が国家に裏切られていた場合は、同族の領主が黙ってはいない。

サザ公国の生命線の海側から叛乱、これは国家存亡の危機だ。

自分の頬に触れると冷たく、血の気が引いていた。

「いいか。お前の頭に渦巻いた想像を決して口外してはいけない。軍人をやっつけていけなくなるぞ。今は余りにも唐突な事で、頭に血が上っているだけだ。わかるな」

無言で頷いた。

口を開けば、ジジに真実を問いただしてしまいそうだった。

「お前……シャルロットのために全てをなげうって、闘うか？」

「あなたはどうかのだ」

「闘う」

ジジが断言した。

力みやけれんなど感じなかった。

「……分からないな。縁や縁の無い少女のためになぜそこまで配慮するのか」

「優男なら抱きしめて慰めてやるだろうが、俺は戦人だからな。

そんな優しさで怒りを誤魔化すことはできない。闘うことでしか無念を晴らさせてやることが出来ない」

「……できますか」

「ふふふ」

ジジが愉快そうに笑う。

不謹慎だと分かっていたが、これから始まる戦いを期待するような表情に、僅かな羨望を抱いてしまった。

「仇討ちができたら痛快だとは思わないか」

「誰に刃を向ける気なのだ。それは叛乱と呼べるものかもしれない」

「そこに義が立っていても、叛乱と呼べるのか？ お前はどうか思っている」

「自分は軍人だ。このサザ公国の軍人であるかぎり、国家と王家に仇なす者は敵だ」

「人間としてはどう思うのだ。幸せに暮らす一家を利己の嫉妬で抹殺するような者に義が在ると思うのか？」

「大義は国家が決める事だ。軍人は国家に忠節を尽くせばいいのだ」

「軍人という考え方に逃げるな！」

雷鳴が落ちるような大喝だった。

向き合ったジジ・フラグの瞳が燃えていた。

「自分が逃げていると」

「違うのか。お前は軍人である誇りを言い訳に困難から逃避している。それは男として恥ずべきことだ」

違う。言おうとした唇が硬直した。

体が震えた。

自分は愚痴をこぼすだけで、一度として本当の困難に立ち向かうとすら考えなかった。

誰にでも乗り越えられる試練だけを選んで生きていたのではないのか？

今まで自分取るに足らない成功と官位を恃みにしていたのだ。

ジジ・フラグの指摘にはまるで返す言葉が無かった。

この男は敵地に等しい場所で、リーゼロツテを守っているのだ。

「お前の信念など、哀れな少女一人救うことが出来ない。お前を含めて俺に挑んできた者たちは浅はかなんだよ。シャルロツトの問題は俺を殺せば全てが円満に解決するほど単純ではないんだ」

「……言葉も無い。何も出来ない自分に怒りしか湧かない……」

「怒りを抱きながら、その怒りがいったい何なのか見つめてみる。苦痛と悲しみに塗れながら生きることになるだろうがな」

「あなたはそうなのか」

「俺だけではない。男とはそういうものだ」

「すごいな……あなたは。ただの地上人ではないのだな」

「事も無げに生きてると思うなよ。元同僚が將軍になつていてという噂を聞くだけで、心の中がかきむしられる様になる。ジジ・フラグはそんな浅ましさを持っているのだ」

自分で言うような浅ましさは感じなかった。

それよりも突然現れた自分に対して、なぜこつも胸襟を開いて話せるのだろうか。

同じ男として、この男の荒涼とした爽やかには好感を抱いていた。

演習場を延々と走り続け、汗に塗れたリーゼロッテが立ち止まる。

「……カイン殿」

リーゼロッテに表情は無い。

胸だけがふいこの様に大きく動いている。

「シャルロット殿……で、よろしいか」

シャルロットが頷く。

何か言葉をかけたかった。

シャルロットの瞳には強く鈍い輝きがあった。

無表情な仮面の下には強固な意志がある。

「兵は」

優しい言葉など思いつく訳も無い。

シャルロットは一人の戦士であることを選んでいるのだ。

「兵は走れなければ務まらない。ジジ・フラグ殿のやらせている

事は無茶に思えますが、間違つてはいない」

「はい。私はジジ・フラグ殿を信じています」

「それがよろしい。主従とは互いに信が無ければいけないのだから」

「私は調練に戻ります」

シャルロットが頭を下げ、背負った背囊に振り回される。

支えてやりたい自分を制止する。

彼女を助けたという事実が欲しいだけの自分を飲み込み、駆けていく背中を見つめる。

君はどこへ走って行くのか。

戦いの果てには何の功名も無く、滅びが待つだけだ。

「……」

頬が濡れていた。

止め処なく涙が溢れる。

「当たり前前の幸福に背を向けて生きる事を選ばれたのか」
ジジ・フラグが目を閉じる。

この男にも忸怩たる思いがある。

その思いを捻じ伏せ、シャルロットを鍛えているのだ。

「選ぶ事すら出来ない。 15歳の少女がそれでも今の道を選んだのだ」

頷いた。

涙は止まっている。

#011の章のさいごに（機体解説）

劇中でサザ公国の機兵の顔ぶれが多国籍です。

ブローウエル、ガディフォール（ラングラン王国）

ギルドーラエエ（シュテドニアス連邦）

保有台数は明記していませんが全て輸入したものです。

ちなみに国産の機兵は

グラフドローン、ルジャノール改

以上の2機種です。

ちなみにバゴニア連邦とは戦争状態にあるので、バゴニア製の機兵は導入されていません。

なぜC級以上の魔装機兵が国産されていないかというと、2点の問題があるからです。

第一に精霊契約の魔術師が在籍していない。

第二に高出力リアクターを生産できる工場が無い。

最も致命的なのが第一点で、この問題がクリアされない限りC級魔装機兵が生産できません。

そのため海洋国家であるサザ公国は他国から機兵を輸入しているのです。

（ラングラン王国やシュテドニアス連邦も代理戦争として戦力を提供し、戦闘データを回収している）

ガディフォールに関しては、ひどいきき下ろされ様で、武装レイアウトから戦術思想まで否定された上で改造されています。

重装甲化とか設計思想に反しまくってます。

可変翼にビームガンを設置するとか・・・狂気の沙汰だと思う。高機動時の射角の制限は致命的な欠陥だと思う。

原作でも不遇なのだが、（装甲が薄いのに）足を止めて撃ちあつたり、（運動性が高いのに）接近戦が苦手だし、ラングラン兵の能力

が低すぎて、ヒット・アンド・アウェイの戦術そのものができなかつたりします。

身の丈に合わない兵器そのものです。

MS系の名あり敵パイロットが搭乗していれば、それこそ鬼の様な性能だったろうに……

味方で登場するのが、ザツシュ（EX）、テリウス（EX）では強さをまるで実感できませんね。

ブローウエルは準国産とも呼べる仕様なのです。

できるだけ劇中はオリジナル魔装機のディアブロに性能が肉薄するように扱っています。

足の遅い機体なのですが、ディアブロ譲りのウェイトバランスの良さが継承されており、砲を排除すれば接近戦にも強いのです。

厚遇していますが、カスタム化への説得力と想っていたきたいです。

ちなみにブローウエル・カスタムの性能の悪魔さはSRW史の中でも伝説です。

すごく……（性能が）ヴァルシオンです。

ギルドーラ系に関しては輸出に際し、性能の安定化を図るために出力を下げた仕様になっています。

性能とか生産性とか無視しているシュテドニアス製の中で数少ない堅実な機体です。

サザ公国は水系と相性のよい操縦者が多いので、性能の低下は問題ないです。

ディアブロと同様にウェイトバランスに優れ、体術に秀でた操縦者には評判が良いです。

シュテドニアス製で代表格といえばバフォームとダイオンが挙げられますが、重機兵に分類されるこの二機は攻撃力が高い反面、壊滅的なウェイトバランスのためホバーやエーテルジェットで補助しな

いと陸上歩行が出来ない。

そのため小回りが利かずデリケートな任務に向かない。(その欠点

をシュテドニアスは物量(総合火力)で補っている。)

そんな理由で輸入には至っていません。

#011の章のはじめに

あらすじ(2)

地上世界の戦士ジジ・フラグはひよんなことからシャルロット・フラグ(リーゼロッテ・ターナー)を従者として受け入れる事となる。

彼女の事情を知った時事は彼女を弟子にして仇討ちのための訓練を課す。

しかしそれは事件に大きく介入する事となり、刺客団を差し向けられる。

死闘の末、刺客を葬るのだが、これからジジとシャルロットは暗殺者に狙われ続ける事となった。

暗殺者を退けながら、ジジはシャルロットに訓練を課す。

常軌を逸した激しさに、彼女の身の上を知る兵士の反感から諍いが続いた。

ガワンの息子カインも憤慨する一人であったが、事情を知るにつれ事態の深刻さを理解する。

黙々と走るシャルロットの姿に、男たちは忸怩たる思いを隠せなかった。

この章の登場人物

ジジ・フラグ

地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。

ラ・ギアス側の召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。

> i 2 9 9 6 7 — 3 8 5 1 <

シャルロット・フラグ

サザ公国の建国功臣の末裔。謀略により家族を抹殺される。

ジジ・フラグに従者として下賜され、今は弟子となっている。

> i29970 < ruby > < rb > 3851 <

呉業 < / rb > < rp > (< / rp > < rt > じ < / rt > < rp >
> ぎょう < / rp > < / ruby >

火星・移民軍の総帥。地球連邦政府による弾圧に対する報復として小惑星を地球に落下させる任務を帯びる。

ジジ・フラグの義父。

カミュ・神原

地上世界では有名な科学者。PT開発を黎明期から携わり、果ては個人でPTの密造密売を行っている。

サーヴァ・ペネリウス

古代ラ・ギアスの著名な魔術師。現代では神格化されている。現在は幽霊として存在し、ジジ・フラグなどを召喚する。

ゾナン・フィート

サザ公国の宰相。以前のガワンの上司に当たる。

ゾナン・フィートは眉間を揉みながら目を閉じた。

摂政の居室には自分が一人居るだけだった。

膨大な報告書に目を通し、一つ一つの情報を整理していく。

この一ヶ月の間にサザ公国とバゴニア連邦の軍事的緊張は一気に加速していた。

バゴニアの行う離間の策によりナンド、フド、バナンの三州の動向がかなり不透明になった。

王妃が行ったであろうターナー家に対する粛清は三州の領主それぞれに密告された事は間違い無い。

開戦を控えた状況にありながら州軍の抱える海軍の動きは鈍かった。

王室に対する不信から生まれた抵抗ではあるが、王妃が粛清を行ったという証拠は挙がっていないので、明確な叛乱には至っていない。

もしも三州の叛乱が起きれば、国境と海岸線で軍を挟まれる事となる。

そうなれば、海側に退いて各島の砦に立てこもりながらのゲリラ戦は不可能となる。

瞑目する。

閉じた目蓋の裏で光の残像が動きながら自分を包んでいく。

疲労した頭脳が冷却され、思考が冴える。

しかしそれは疲労で埋没させていた心の棘をはっきりと感じさせた。

まさかターナー家を使ってサザ公国の分断を行おうとは予想外だった。

中興の臣として知られるブエフ・ターナーは海軍の近代化に尽力した事と国内から有能な人材を多く集めた事で知られている。

特に海軍の近代化は彼無くしては在り得なかつたと言える。

私財をなげうつて軍艦や機装兵を購い、シュテドニアス連合から有能な將軍を招聘した。

結果として海軍の近代化は順調に進み、バゴニア連邦との戦争でも領土を防衛する事ができたのだ。

ターナ家とその類縁は国家に対する忠誠が厚い、しかし重大な裏切りの後ではその忠誠が憎悪へと変貌してしまうことは想像に難しくなかつた。

王妃の処断、それは効果的に行わなければならない。

しかし今の様な王家と地方が相反している状況では、王妃の処断は二つの勢力を完全に分断しかねない。

今のところ王命を用いた処断は勝算無き賭けでしかないのだ。

誰かあの王妃を斬ってくれないものか。

ぐるぐると思考が回る。

一人だけ思い当たる人物が居た。

地上人ジジ・フラグである。

この男はガワン・カーワンからターナー家の遺児リーゼロツテを匿っている。

ガワンの言ではリーゼロツテに尋常ならざる修行を課している。

何のために。との問いには答えなかつた。

それは王家への忠誠が答えを阻んだのだろう。

想像に難しくない事である。

リーゼロツテに仇を討たせるつもりなのだ。

しかし、何のためであろうか。

王家に恨みを持たないこの男がなぜ仇討ちに助力するのか。

無知ゆえの蛮勇ではない。

この男を分析していけば、この世界に召還され、行った戦闘の全てに冷静な思考と迅速な状況判断が見える。

それに圧倒的な戦闘力が加味されているのだ。

ジジ・フラグという男は蛮勇という言葉では片付けられない才気

を持っている。

一軍の将たる資質が在るはずの男が地上では傭兵として世界を浪々としていた。

それは不思議である。

浪々としてきた10年の軍歴の中に仕官の誘いはあつたはずだ。

ガワン曰く

「彼が仕官出来なかつた理由は祖国を持たなかつた事が大きい。まず土地や物質に執着せず、人との関わりに重きを置いている。

それは人として大きな美德ではあるが、それが過ぎれば身を滅ぼす毒となり得る」

思考の中のガワンの言は更に続く。

「祖国を持たなかつた事は彼が戦災孤児だつた事と少年兵として育てられた事が関わっている。彼には拾われる以前の記憶が無い。

それ故彼の記憶の始点は兵士として始まっている。繰り返す流血の日々と移動が日常では故郷を持てるはずも無く、それが彼にとつての正常になつていたので」

「つまり我々のように帰るべき場所を守る者とは心情が違う。言つてみれば平和な世界を殺戮で創り出すことができても、平和の只中には居場所を持たない。だから新しい戦場を求める」

「あの男は世界の生み出した闇そのものです。その黒さが漆のように澱みなく澄んだものだから、誰もが惹かれるのですが、本質は邪悪そのものです」

まるで友を語るかのような口上だった。

ガワン曰く

「百年の知己を得たようなものです。それゆえあんな男が一人世の中にのさばって生きても良いのではないかと愚考したりもします」行動理念こそ歪ではあるもののガワンからは不世出の傑物と評され、慕われているのだ。

加えて今まで喧嘩騒動を起こした兵には反発されながらも実力を認められ支持され始めている。

根が古風な武人なので兵士には好かれるようだ。
この男に会ってみようと思えた。

慎ましい佇まいの屋敷だった。

一家が住めば手狭になるような家にジジ・フラグは住んでいる。

従者が訪いを言うが玄関からは人の気配は無い。

玄関を右に回った庭から尋常ではない気配がしている。

土を踏む音と何かを叩きつける音が数度あった。

稽古なのだろう、しかしまるで気合が聞こえない。

「訪いに気付いてはいないのだ、庭へ行こう」

従者に告げる。

男女が4メートル程の間合いで立っている。

ジジ・フラグとリーゼロッテである。

得物は剣だった。

二人の発する気配は仕合そのもので、リーゼロッテには背後に立つ私達の姿に気付かなかった。

両者の間合いがじりじりと詰まる。

ジジ・フラグの握る得物は細い竹の棒であったが、真剣を持つリーゼロッテを押ししていた。

今のリーゼロッテは目の前の竹の棒が魔剣や妖刀の類に見えているのだろう。

ジジ・フラグが無造作な構えから青眼へ構えを移す。

まるで圧力が違う。

踏み込んだ剣戟があらゆる動作に変幻するのがこの構えの持つ強みである。

ましてこの両者ほど実力が開いていれば、リーゼロッテに次手を予想することは困難である。

リーゼロッテは動かない。

圧倒する気を当てられながら、無為の一撃を止めている。

これは修行なのか。

お互いが必殺の気をぶつけながら対峙している、これは既に死合
いへとなっているのではないか。

リーゼロッテの気配から動揺が消失していく。
変幻に対応するのではなく、己の最も信頼する技を遣う方針へ転
換しようだ。

無謀ではあるが、剣からは迷いが消える。

リーゼロッテの腰が僅かに低くなる。

重ねるようにジジ・フラグの姿勢がわずかに低くなる。

ジジ・フラグの右足が地を爆ぜるように蹴った。

そう見えた。

右足は地に据えられたままだった。

今の偽装に乗せられたリーゼロッテが突きを放つが、動きに呼応
していない刺突は隙だらけだった。

ジジ・フラグが僅かに動き、小手で剣を弾き、流れる動作で左肩
を突いた。

そのまま竹の棒で押し倒し、鳩尾に拳が当てられる。

絶息したリーゼロッテは気絶した。

ジジ・フラグはリーゼロッテの体を引き起こし、背中を押すとリ
ーゼロッテが蘇生する。

呼吸は荒い。

「見事である」

そう言つとジジ・フラグが会釈をした。

眼光はまだ鋭さを失っていなかった。

ゾナンはジジフラグの書齋に通された。

客間や居間は刺客との戦闘で破壊され、ここの住人は比較的無事
な部屋を使っているようだった。

ジジ・フラグの書齋は実に雑然とした様子だった。

史書や技術書が乱雑に置かれ、所々に付箋が付けられている。子供の読むような絵本や、著名な詩集は手の届きやすい机に置かれている。

「……どうぞ」

シャルロットが二人分の茶を配膳する。

会釈をした時に、彼女の黒髪が揺れた。

ゾナンは彼女の母の面影に懐かしさを感じた。

「王城で顔を見て以来であるな」

ゾナンは改めて椅子に座りなおし、体をジジに向ける。

「宰相閣下で、よろしいので」

「ここは王城ではない。くだけた言葉で喋っても構わぬ。使者

も立てずに訪れたのは私なのだから」

「助かります。宰相の御用は？ 地上人見物だけではないでしょ

う」

「うむ。単刀直入に申す。私はバゴニアとの開戦を遅らせたい

と思っている。何か妙案は無いか」

ジジが声を抑えたように笑う。

「可笑しい事を尋ねる。地上人の俺に献策を求めますか？

それこそ王城では賢者達が策をたてているのでしよう」

「無い。今回のバゴニアは必勝を期して開戦を迎えようとしてい

る。強行にでも宣戦布告するつもりだ」

「受けて立てばよろしい。武門とは戦う事を宿命されている」

「その通りだ」

ジジの態度は至って柔らかい。

召喚されたばかりのころに見せた鋭利な側面は表に出ていなかった。

だがそれは拒絶の意思を暗に示していることだと感じられた。

「しかし、恥ずかしながら、自軍の対立をまとめきれない現状では、国は滅んでしまう」

「民は生き残ります。今が国の命日と思い諦めてください」

「お主の言う事は最もである。開戦を控えこの体たらくでは、国家の命数も尽きたかに思える。しかし私はこの国の宰相である。」

国家を存続させるためには全てを尽くさねばならない」

「では尽くすが良いでしょう」

「お主も知っているであろう」

「何を？」

「ターナー家の事だ」

「知っていますね。風聞に聞く程度には」

「私見を述べて構わぬ」

「では」

ジジが一息に茶を飲み込む。

「このターナー一族の至誠と自己犠牲が無ければ今の国家は無かつたというのに、ターナー家は俺の知る限り最も残酷な方法と軽薄な動機によって滅ぼされた。この事がターナー家の親類である三州公に不信を抱かせるのは必然だったと思う。今にして思えば、この国の良心とも言うべきものはターナー家の姿勢や規範そのものだった。たいした理由も無く一族を滅ぼした王家が悪の巣窟に見えても無理からぬ事。つまり身から出た錆だ」

「全く、その通り」

やはりこの男は王府と海側の地方州の関係の悪さまで感づいていた。

防衛上の拠点や港を有するこの三州は、この国の最後の防衛線であり、事実王城を陥落された際もゲリラ海戦で戦況を打開してきた史実が多くある。

現在の三州の対立とは裏腹に、防衛上の重要性はまるで変わっていないのだ。

「だが、何もかも遅い。バゴニアが裏で糸を引いたのであるこの離間の策は成ったのだ。事件の首魁を斬って国内の意思をまとめるまで開戦は待たれないだろう」

「お主もバゴニアの仕掛けた離間と読むか」

「古代から男女の嫉妬を使った離間が多い。
はその典型的なものだ。」

証拠は無いが、今回

シャルロットが二人の空いたカップに茶を注ぐ。

ささやかな湯気が二人の会話を阻んだ。

「俺は近年の戦史を読んだだけだが、バゴニアは陸軍こそ精強だが、海軍は情弱だ。それゆえ精強な海軍を持つサザ公国は地形を利用して今日まで撃退してきた。海軍同士の戦いでは勝負にならないからこそ戦力を分断する策を採ったのだ。この離間を男女の情に隠して行ってきた相手は相当の手練といえる」

「手練？」

「名人芸とも言える。この離間の発起人は事件の下手人の背中を押し、子飼いの暗殺集団を斡旋しただけだ。半端な知恵者ほど手数多く策を積むのだが、下手人が事件の証拠を秘匿することすら見通していたのだろう」

「その通りだ」

「しかし。一つだけ解せない事がある。中世以降の民族間の対立からこの戦は続いているのだが、バゴニアがサザ公国の様な小国を落す事にどれほどの意味があるのか。この国の海軍を手に入れた軍を増強するにしても、あまりにも強引なやり方だ」

「王家の保有している地上世界とのゲートが狙いなのだ。バゴニアは召還魔術師が数名居るだけで、地上とのゲートを所持していない。地上との交易で機械技術の導入を考えているのだろう」

ゾナンは小国という指摘に憤慨を覚えたが、ジジの指摘は正しかった。

「いまいちゲートという解釈が分からないな」

「この世界と地上との接点といわれるものがゲートだ。自然発生するものから、魔力をキーにする魔法陣ものなどさまざまな物がある。

この国の所持しているゲートは王以前のアーヴィン家で管理されていたものなのだ。ゲートそのものは当代宗主から次代宗主への

口伝のみと言われ、全くの秘密とあっていい」

「その秘事が失われている事は考えられないか？」

「無い。アーヴィン家は元々この地方の神官で血筋のはっきりした家なのだ、家督継承には厳しい掟が設けられ、相続が滞った事は400年の間で2度といわれている」

「奪取可能なゲートの中では手軽ということか」

「私達にはその規模や形すら分からないのだがな」

「王家の所持するゲートの争奪戦を軸に事件が続いている事だったのか……」

二人は一息ついて茶を呷った。

ジジが二、三度頷き、喋り始める。

「宰相は開戦を遅らせて欲しいと言ったが、俺からすれば無意味な策に思える」

ゾナンは無言で聞く、

「少数精鋭で補給拠点へ奇襲」

開戦を止めるという次元の話ではなくなっていた。

侵攻軍の急所である補給線を叩いてしまうということだった。

「……聞こう。まず空軍の迎撃をどうする」

「問題ない。ガワンから見せてもらった偵察機の映像から判断すれば、空をただ飛ぶだけの技術しかない相手なら、倒すことも振り切る事もたやすい」

「手厳しい、ただ飛んでいるだけにしか見えないというのは」

「あくまで私見であるのだが、この世界の人間はまだ魔装機兵というものを戦車や戦闘ヘリのような便利なツールの延長だと考えていると思う。俺は違う機兵とはツールでも人間の延長でもない。

人と似て非なる強靱な体なのだ。人間が人間時代に培った学問で作られた戦闘技術が基本の相手は俺の敵ではない。はっきり言えば、ラ・ギアスの機兵運用思想は地上人からすれば古すぎる。俺達の世界は人間時代の戦術継承から強力な個性による突破に時代が移っている。」

「そこまではつきり断言できるのか」
ジジが頷く。

この男が戦闘に対して幻想を抱いている事は考えられない、事実を繋ぎ合わせて分析した解なのだろう。

「しかるべき武装さえあれば連隊規模の戦力を行動不能にすることができる」

「一機で」

「最低でも手練の4機」

「…生還を考えられない」

「だからこそ拠点への奇襲を献策したい」

「分からないな。ジジ・フラグがこの国に好意を抱いているとは思えない」

「俺に張り付いている監視の目を全て外したいのさ」

「何故？」

ゾナンは僅かに胸の動悸が早まっている事に気付いた。

この男の目的は知っている。

それを今ここで、宰相である自分に言えるのか。

「王妃をシャルロットが斬るため」

背後のシャルロットが僅かに動く。

彼女の僅かに乱れた呼吸が聞える。

「お主ならば容易いはずだ。なぜ回りくどいやり方をするのか」

「俺は助っ人に過ぎない。露払いまでしてやっても、仇討ちは本人がやるべきだ」

「それは道理でしかない。王妃を討つ前に死ぬ事もあり得る」

「私はターナー家の最後の末裔として戦います。それはジジ・フラグ殿の指し示した道なのです」

シャルロットは断固とした口調だった。

「助太刀が仇討ちの作法に背くとも思っているのか？」

「生き残った者の務めです。私はターナーの末裔としての誇りを捨ててまで仇討ちを代行してもらうつもりはありません」

「戦いが終わった後のことを考えたことはあるのか」

「私はジジ・フラグ殿の従者です。今も……そしてこれからも」
シャルロットの硬直していた表情が緩み、わずかに視線が泳いだ。
「…そうか」

彼女はジジの生き方を模倣し、戦士として生きる事で、正常な理性を繋ぎとめているのだろう。

ただの少女が青春を捨てただけなのだ。

ジジは腕を組んだまま瞳を閉じている。

この男にもただの少女に苛烈な生き方を強いる事に忸怩たる思いはあるのだ。

仇討ちを本人にやらせるような倫理観を持つ男なのだから。

ゾナンは頷く。

「お主の拠点奇襲の献策は受けよう。必要な資材はラン様を通して集めるが良い」

「機が来れば仕掛ける。それは了承してくれるか」

「了承も何も、お主程の力があれば、我が軍の包囲網は抜けられるだろう。死者を出さなければそれでいい」

ゾナンが立ち上がる。

ジジに背を向けたまま喋る。

「仮に、リーゼが仇討ちを果たしたとする……、その後は如何する」

「ジジ・フラグはいつも変わらない。ただ戦うだけだ」

「何のために？」

「戦いしか知らん。だがなこんな男が生きていく隙間くらい世界にはあるんだよ」

「そうか」

どうしようもない生き方だ。

この男は自分から破滅へ向かっている。

ゾナンは沈痛な面持ちのまま館を後にした。

ジジはゾナンとの会談を終え、昂ぶった神経を鎮めるため、書齋で本を読んでいた。

ジジは三冊目を読み終えた。

扉の外から違和感が近付いてくる。

書齋で史書を読んでいたジジは、警戒を告げる本能の囁きに似たものを感じた。

まるで足音は無かった。

加えて接近する気配すら近距離まで感じさせなかった。

これは相当の手練の刺客か。

机に置いたままのサブマシンガンを見る。

(足元のショットガンを取る挙動は察知されるな)

それが経験から導き出された結論だった。

狭い室内ならばサブマシンガンの速射性ならば室内戦闘には十分な火力だ。

相手が十分な防弾装備をしていれば、初動で制圧射そして離脱するしかない。

音も無く、サブマシンガンのグリップを握り、予備のマガジンを腰に差す。

扉の外の違和感が増大する。

直感が後退を命じている。

今すぐにも窓から退避したい誘惑がうずきはじめる。

それでも理性が退路へ仕掛けられるであろう罠の危険性を警告する。

アンノウンとの距離は遮蔽物を加えて10メートルも無い。

この距離でのサブマシンガンの貫通力はアサルトライフルの性能に相当する。

この場で迎え撃つ。

この結論が覆る事はなかった。
扉を光の粒子が透過する。

(手か?)

(人じゃない? ゴレム? 幽霊か?)

透過する輝きが人の頭部の様なものの陰影を作り出す。

本能的に体が動いた。

サブマシンガンの照準が頭部（いしきめ）に移動し、トリガーが引かれる。
射線は頭部と胸部らしき部位のあるであろう箇所集中した。
短い連射音と共に光の粒子が霧散する、
破壊された扉の外には誰も居なかった。

体液の染みも無い。

アンノウンはまだ…居る。

「……………」

何かの声だった。

ノイズの混じった女性の声だ。

光の粒子が再び収束する。

それは人の形をした輝となった。

蛍光灯ほどの明るさの粒子が、歩むように近付く

「誰だ」

「ペネリウス」

人型の光が名乗る。

(生命体ではない。 幽体というものらしいな)

ジジは構えていたサブマシンガンを下げる。

「どうか、動かないで」

拳動が空気の対流を乱し、輝きの粒子が形を変えて霧散する。

「……………らしいな」

「理解が早くて助かります。 地上人」

「ジジ・フラグだ。 お前は何者だ、精霊か怨霊なのか」

「この世界の定義では、魂だけの存在「幽霊」とよばれるものです」
幽霊という存在を疑いなく受け入れている。

俺もいよいよラ・ギアスという世界に染まってきたのだな。

ジジは内心苦笑した。

「あなたはなぜこの世界に自分が召還されたかご存知ですか？」

「さあな」

「というより、召還された瞬間何が起きたか分かっていないのではありません」

「分かったふうな言い方をしようだな」

人型の粒子の口元が僅かに微笑んだように見えた。

たとえ表情が読み取れなかったとしても、稚氣に似たようなものを感じた。

それは不快なものだった。

「地球はどうなったと思いますか？」

「アースブレイカーの落下は防げなかった。地球は大惨事だ」

頭部に相当する輝きが逡巡するような陰影を作る。

「本当にそう思いますか」

「義父の作戦は完璧だった。俺は義父を倒し、守備隊を突破して内部から重力ブレイキをかけるつもりだったが、ラ・ギアスに召還されてしまった。あの時点で俺以外アースブレイカーに取り付いていなかったのだ。落下は止められない」

「アースブレイカー程の巨大隕石が地球を直撃すれば、地球とプラーナを共有しているこのラ・ギアスもただでは済みません」

「なに？」

「この地底世界を存続させている大元は地球から生じる膨大なプラーナです。地球からラ・ギアスを循環しているプラーナに大きな異状が生じれば環境調和術式や次元定着術式を損傷するでしょう。

地球という一個の生命体にとっては表皮を壊しただけの傷ですが、生命体にとっては致命的な環境変化が起きてしまうのです」

「・・・アースブレイカーまでラ・ギアスに召還を？・・・
だが重量と落下エネルギーを都合よく相殺できるものなのか召還術とは」

「無理です。呼ばれたのは貴方だけですから」
言葉が無かった。

この幽霊が俺を召喚したのか。
「私には貴方を召還しなければならぬ理由がありました。だから死んでは困るのです」

「俺はお前に自分の生死を委ねる気は無い。貴様の願いよりも義父との戦いを完遂したかったのだ」

「アースブレイカーは消滅しました」

「消滅？」

「そう」

「馬鹿な。あの質量を消滅させるなど不可能だ」

そもそもアースブレイカーとは総重量を計算するのが馬鹿馬鹿しいほど巨大な岩塊なのだ。

それを消滅させるためのエネルギーがどれ程必要なのかは想像でしかなかった。

「滅びの呪文を使ったのです。サイフラッシュを」

「サイフラッシュ？」

「魔装機神サイバスターの『サイフラッシュ』とは原典のサイフラッシュの特性を解析し、単一精霊の能力だけでも行使できるように魔術の格を下げたもの。原典のサイフラッシュとは似て非なるものです」

「原典というのは」

「まだこのラ・ギアスが惑星だった頃、地球とラ・ギアスを繋ぐ次元トンネルに生じた無数のマイクロブラックホールを消滅させた魔術。風水土火の4つの高位精霊のプラナーを共鳴励起させ、その力を解放する。その力は全ての物質を局所的に消滅させるのです」
「それを地球で行使したのか・・・無茶苦茶だな。お前に世界の次元なんて関係ないのか」

「いいえ、私ではありません」

「私は幽霊しかも地縛霊のようなものですから、現世の器物に力を

行使することはできません。中には幽霊でも操作できるゴーレムなどの、ささやかな道具はありますが、幽霊の知能には、生前の魔術者の力量が比例します。自分で言うのもおかしいですが、ここ数万年以内で私以上の術者は存在しなかったはずですよ」

「……こうやって対話で相手に干渉する事ができれば、誰か自分の代行者を使ったな。その者にサイフラッシュを詠唱させたのではないのか」

「そうです」

「……現実的な話ではないな」

ジジが肩をすくめる、

「この世界の魔装機に搭乗したが、この世界の魔術とは万能の利器ではない。大きな力を行使するためには、それに見合った対価と適性を求められる。アースブレイカーを消滅させるほどの力を人間が持っているとは思えられない。仮に原典サイフラッシュを発動できる器物があつたとしても、出来る人間は存在しない」

「なかなか良い洞察です。その通り、四精霊と契約しサイフラッシュを行使すれば術者のプラーナは瞬時に枯渇して死ぬでしょう。必要なのは強大なプラーナの持ち主なのです」

「唐突にそういう人物が現れた……そう言つつもりか？」

「カミュ・カンバラ、あなたは知っていますね」

「知っている」

心臓が不整脈のような不規則な鼓動になる。

体表に動揺が浮き上がろうとしていた。

カミュ・カンバラが仕組んだ事件が俺の部隊を壊滅させた内情まで知っているのか。

地上世界に居た頃から、親しい数人にしか喋った事がない秘事を何故……。

「あの女を召喚したのか……」

収束した光の粒子が頷く。

「お前はあの女の本質を分かっている。あれの本質は破壊だ。」

「断じて世界平和などではない」

「世界を救う器物を完成させるために必要だったのです」

「世界を滅ぼす気か？」

「世界など、滅んで良いのです。私は私の目的のために貴方達を召喚したのだから」

「俺が貴様の思い通りになるだど！」

ジジは思わず声を上げていた。

自分の行動が誰かに操作されていると思えば、その違和感は耐えられるものではなかった。

ペネリウスの光の粒子が跳ねる。

それは笑っているようにも見えた。

「何がおかしい？」

「すでに私が集めた要素は動き始めています。ジジ・フラグよ、私がそなたの闘争本能を考慮しなかったとも思うのか？ お前は優れた戦士です。それゆえにこれから起こることは避けられないのです」

「……」

「バゴニアへの奇襲、あなたは意図せず私の思うがままに動いているのです」

「ほう」

「あなたの妻のための行動だとしても、それすら私の意志の範疇なのですよ」

「シャルロットは妻ではない従者だ」

わずかに人型の粒子の輝きが明度を落とす。

「…今はそうでしたか」

今は、という言葉が引っかかるが。一々それを斟酌しない。

「何か言いたそうだな」

「他人からの思慕に鈍感なのだと思います」

「男は己の使命に従って生きればそれでいい。少なくとも後ろ指を差される事はない」

「…使命ですか。男とは単純でよろしい」

「その単純な男を利用してはお前が言うかよ」

ペネリウスを形作っている光の粒子が徐々に解け、霧散しようとしている。

こうやって会話できる時間も尽きようとしているのだ。

「解せない事が一つある」

ジジは淡々とした口調で話を始めた。

「何か？」

返答するペネリウスの姿の拡散は進む。

「俺の運命を操っているお前が、わざわざ様子見をするのか。遠方から覗いている方がはるかに確実だった」

「流石に勘がよろしい……物事の要点を大まかにだが掴んでいる」

光の粒子の密度の薄くなったペネリウスからは表情を読み取る事はできなかった。

「世辞は要らん」

「はつきり言えば私は貴方ではなく、義父の方を召喚するはずでした。それが、なぜか召喚されたのは貴方の方だったのです。地

上人でもあなたの義父の統率力、決断力、戦闘力は卓越していました。私の目的を達成する核の人物として召喚するはずでした」

「地上人と思つて舐めているから、思い通りにならないのだ。まるで、全てが自分の掌の上で事が進んでいると思つていろいろだが

……。だが思い知つただろう、お前が運命を操っているなんてことは、ただのまやかしだ。お前の不完全な理屈では男の生き方一

つ思い通りには出来ない。まして呉不敗とまで称される英雄がお前の思い通りになるものか！」

「そこまで尊敬している人物を何故殺したのか？」

ペネリウスの姿は消失し、声だけが空中から聞えてくるだけだった。

「人が死ぬ事は不可避だ。だが死に方は選べる。だから英雄は英雄のまま死なせてやりたかった」

「それでもあの人が生き延びる分岐はあったのですよ。　むしろあなたはその運命を捻じ曲げたと言える」

「俺達は使命に殉じているだけだ。　お前の言う運命に従って生きるつもりは無い。　少なくとも呉家軍の男なら尚更だ」

「……」

ペネリウスの言葉は聞えなくなっていた。

その場に残っているのはサブマシンガンによって破壊された扉だけだった。

俺は幽霊と喋っていたのだ。

だから相手の痕跡が残らない事も当たり前だと言えた。

多分ペネリウスは唐突に現れたわけではない。

今回は偶然発見されただけで、今まで監視をしていたのだろう。

奴の言葉を借りれば、俺は運命を捻じ曲げたらしく、自分のシナリオ通りにキャストが動かなくなる不安があったのだ。

「運命など……」

そんなものに従って生きていたのでは命が幾つあっても足りないな。

ジジは苦笑した。

#011の章のさいごに（魔術解説）

アニメ版「魔装機神サイバスター」より……

作者は地域の都合により、リアルタイムでアニメ版を見る事はありませんでした。そのため情報のデータソースは小説版となります。OP詐欺と言われ久しく、スパロボの黒歴史と言われていますが、小説版の本作は実に読み応えがあります。DCの陰謀が軸として主人公達の確執や夢に困難に立ち向かう少年達の物語が破綻なく回収されています。

不運な作品ではありませんが、駄作ではないので一読の価値はあります。

サイフラッシュ

（作中より引用）

「滅びの呪文を使ったのです。サイフラッシュを」

「サイフラッシュ?」

「魔装機神サイバスターの『サイフラッシュ』とは原典のサイフラッシュの特性を解析し、単一精霊の能力だけでも行使できるように魔術の格を下げたもの。原典のサイフラッシュとは似て非なるものです」

「原典というのは」

「まだこのラ・ギアスが惑星だった頃、地球とラ・ギアスを繋ぐ次元トンネルに生じた無数のマイクロブラックホールを消滅させた魔術。風水土火の4つの高位精霊のプラナーナを共鳴励起させ、その力を解放する。その力は全ての物質を局所的に消滅させるのです」

と、ありますが。

この文章はアニメ版の設定を利用しています。
ゲーム版のサイフラッシュとは、指向性を持ったエネルギーを広域に放出するMAP兵器です。

アニメ版のサイフラッシュとは、ブラックホール兵器によって歪んでしまった惑星同士を繋ぐ次元トンネルの歪みを正すための手段です。その方法とは次元トンネル内で4体の魔装機神を共鳴させて自爆させます。結果的に自爆したのか、自爆しなければならなかったのかは描写されていません。

ともかく、アニメ版のサイフラッシュは、次元の歪みを初期化してしまうほどの破壊力を持っているという事は知ってほしいです。

SRW・ABSで明言はしませんが、アニメ版サイバスターの存在を遙か過去の出来事としています。

だからこそ、アニメ版のサイフラッシュが伝わっているという事です。

劇中で指摘されている、これほど超越的な魔術の執行は人間には不可能だ。という問題があります。

最も大きな人的ハードルをどのようにして越えたのか、という問題はクライマックスに語られる事になります。

シャルロットの報復と並んでサイフラッシュの謎は本作のキモとなりますので、説明にはもうしばらくお待ちいただきたい。

次章の最後、機体解説でまたお会いしましょう。

#011の章のはじめに

あらすじ(3)

サザ公国とバゴニア連邦の休戦状態は破られようとしていた。地上世界の技術を欲するバゴニア連邦は、地上とのゲート(次元トンネル)を所持しているサザ公国に戦争を仕掛けようとしていた。サザ公国攻略の戦術は多岐に及び、王家にターナー家を粛清させたことはターナー家と類縁関係にある海側の地方州との関係を悪化させるための姦計であった。

サザ公国の宰相ゾナン・フィートは中央と地方の不和を調停するために奔走していた。

しかし状況は開戦への秒読みへと悪化していた。

ゾナンはかつての部下ガワン・カーワンの勧めで、地上世界の戦士ジジ・フラグに会い、開戦を遅らせるための献策を求めた。しかしジジの返答は、拠点への奇襲という大胆な作戦だった。侵攻軍を孤立させる代価として、奇襲部隊の生還は望めない。ジジの献策を受け容れたゾナンは、館を後にするのだった。

ゾナンが帰路に発ち、第二の来訪者が現れる。

その人物とは幽霊「ペネリウス」だった。

意外な来訪者はジジに自分が召喚した事実を打ち明ける。

同時に召喚された際の戦闘の顛末を知り、ジジは激昂する。

本来ペネリウスはジジの運命を掌握しているはずだったが、正規の手順を経ずにジジを召喚したため、ジジは思い通りに動かなかった。その結果ペネリウスは今までジジを監視する事となったのだが、逆にジジに存在を感知され、ジジは急速にペネリウスの支配から脱していくのだった。

この章の登場人物

ジジ・フラグ

地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。

ラ・ギアス側の召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。

> i29967 — 3851 <

シャルロット・フラグ

サザ公国の建国功臣の末裔。謀略により家族を抹殺される。

ジジ・フラグに従者として下賜され、今は弟子となっている。

> i29970 — 3851 <

ガワン・カーワン

サザ公国の建国功臣の末裔。元親衛騎士団長だったがその職を辞している。

今はラン・アーヴィンの従者となっている。

アナン・トウトウス

ヴォルクルス教団コーアン派の教主。 間諜として働く事でガワンから教団を庇護されている。

忍びの技や、魔術を用いる事ができる。

ガワンは居室でバゴニア軍の情報に目を通していた。

椅子にもたれるように座り、くつろいでいると人の気配の様な違和感を僅かに感じた。

僧形の男が音も無く現れ平伏していた。

アナンがガワンを訪ねるときはいつも気配を消したままだった。当人が気付くまでその場に平伏している。

誰が決めたわけでもなく、アナンが始めた事である。

「アナンか」

「そろそろ開戦の時期と思い、尋ねさせてもらいました」

アナンが顔を上げ、静かに直立する。

「ガワン様がバゴニアに付いた場合、爵位と將軍の地位を保証するようです」

アナンが表情を変えずに言う。

「戦後のこの国を統治するための手駒か」

「ガワン殿は今でこそ閑職に就いておられますが、親衛隊長まで務められた方です。軍部に信奉者が居たとしても不思議はありません」

「私が公国に弓を引いたとしても、兵は付いてくると思っか」

今まで訓練を課した兵の顔がいくつか浮かんだ。

どれも若い兵で、親衛隊を去る時涙を流してくれた者も居た。

彼らを巻き込むのかと思うと暗澹たる気持ちになる。

「付いてきますな。恭順派と抗戦派に勢力を割る事となります。

カーワン家に見限られたとすれば、この国の命数は尽きています」
「そのカーワン家も私の代で没落しているがな」

「名門と言われる家は隆盛と衰退を繰り返しながらも続いています。

カーワン家の困難の時代がたまたまガワン様だっただけでしょ」
「いっそ困難に飲まれ潰れてしまいたい」

「それは、バゴニアからの誘いを断るといふことですか。王家に対する忠信を失っているというのに」

「なぜそう思う」

「ターナー家の粛清、盟友と思慕していた女性の死はあなたから王国に対する情熱を冷却してしまった」

「……あくまで仮定の話だな」

リベル・ターナー、リーゼロッテの母を……あの人を思慕していた。

今となつては虚しい想いだつたのだと思う。

親友の妻となつた事で想いが冷めたわけでもなく、遠くから姿を見ているだけで充たされていた。

「いえ。事実を申しているだけです。ガワン殿、命を惜しまれよ」

アナンの語気が熱を帯びている。

まるで死ぬ事を留めているようだった。

「私を武人と知っていて言うのか」

「ガワン殿程の勇士ならば仕える主さえ選んでいれば、この時代で雄飛することもできます」

「だからバゴニアに仕えろと言うのか？ 祖国に弓引くことはできぬ」

「……」

アナンがため息を吐きながら首を振る。

「こうして私の間諜として仕えて何年になる」

「15年も経ちましたな」

この男は15年前から雇いだした間諜であった。

いつの頃からかこの男が身分を明かし、ヴォルクルス教団コーアン派の教主である事が分かった。

多くの国家で邪神として認知されているヴォルクルスを主神と崇める彼らはバゴニア連邦政府に弾圧され、国外へと追放された。

サザ公国に流れ着いた彼らを保護する代わりに、教団の僧が間諜と

なる事を対価としたのだ。

「私の心情を察したために仕官の話を持ってきたわけではない事は分かっている」

ガワンが朗らかに笑うと、これはしたりとアナンが自分の坊主頭を撫でる。

アナンがこうやって主人を謀略に巻き込むことも今回が初めてではない。

自分を生かすことが教団を存続させる事に繋がるのだからこのように離反を誘う事も当然といえた。

「分かりますか」

「教団を生かすために私の地位を確保しようとした事は分かっている。仮にバゴニアの仕官を受けたとしても、戦後処理が済めば、教団と私の関係を追及される。そうなれば私と教団が粛清されてしまっぞ」

「しかし、教団とガワン殿の関係は今日まで秘匿されております。

バゴニアが感付いているなど」

「今回のバゴニアの戦略は緻密だ。私達ですら王妃にターナー家を粛清させる事を止められなかった。おかげでサザ公国は中央と地方軍で分離状態になっている」

「この仕官が戦後処理の先までの策でありますか。いつもならば数で押し切る戦をしているバゴニアが緻密な謀略を張るとは……」

「アナンもようやく納得した。

「教団を存続させるのならば、自立の道か新たな支援者を探す事だ」

「心配には及びませぬ。元の流民に戻るだけです」

アナンが平伏する。

今更流民に戻ったところで安住の地はないだろう。

それどころかヴォルクルス教は一部の宗派を除いて弾圧されている。

彼らが邪教徒狩りで粛清される事は目に見えていた。

ガワンが瞑目する。

「その前に、ジジ・フラグという地上人に会ってみることだ」

「ルルル様を救った男ですな」

「そうだ」

「どのような人物ですか」

伏せていたアナンの目が輝く。

言うべきではなかった。ガワンは僅かに後悔した。

「一代の英傑……としか言えぬ。地上ではなぜこれ程の人物が埋もれていたのかと不思議に思う」

「強いのですか」

「強い」

断言する。

一度だけ暗殺者を返り討ちにしたところを目撃した。

市中を散策してる時、背後から匕首を刺そうとした男に振り向いて発砲した。

頭部に三発撃ち込み、男は絶命した。

その後ジジは何事も無かったように市中の散策を続けたのだった。ジジが暗殺者に襲われたのだと合点したのは発砲した後で、二人の何気ない闘争が実は恐ろしく次元の高い事だと思った。

あれほど気負いも無く、当たり前前に人を殺す人間を見た事は初めてだった。

ガワンはその時の戦慄を思い出し、唾を飲み込んだ。

その所作をアナンは見逃さなかった。

「分かりました。会ってきましよう」

アナンが居室から去る。

「おい」

アナンを呼び止めようとしたが、無駄だと気付いた。

あの男には霧散するように消える忍びの技があるのだ。

ジジには自分が会うべきなのだ。

後悔だけが胸で疼いた。

ジジは機兵の模擬戦の申請を軍官の総務に提出していた。
若い兵士の数人に機兵の操作の講義を請われ、そのための手続き
だった。

ガレージの片隅で行われるシャルロットの座学に興味を持たれた
事がきっかけだったと思う。

ジジは待合の硬いソファに腰掛ける。

彼らが座学に参加し始めた事で、軍の居心地はとても良くなった。
得体の知れない地上人と思われていた事は確かだと思う。

今では講義を受ける兵士も多くは、元々シャルロットの扱いに憤
慨した者達だった。

何度が彼らに襲撃された事はあったが、一人残らず打ち倒した。
戦う中で何か通じ合うものがあつただろう。

不器用な接し方だと思うが、百万語を尽くすよりも分かり合える
と思う、少なくとも自分にとっては。

一人物思いにふけていたジジの五感が、理性に僅かな違和感を
伝える。

目の前には頭を剃り上げた僧形の男が平伏していた。

「急な来訪をお許しただきたい」

「……」

「私はアナン・トゥトウスと申します」

「俺は坊主や僧侶の知り合いは持ってはいないはずなのだがな」

「ガワン殿より紹介され、どうしても会ってみたいと思いました」

「会っただけなのか」

立ち上がる。

静かに、少しずつ体を駆け巡る血が熱くなる、

寝ぼけたように半分閉じたアナンの目が燃えている。

僧侶の瞳ではない。

「いえ、失礼ながら実力を量りにきました」

「死合いか」

「ジジ殿はラ・ギアスで魔術をご覧になった事はありますか」

「無いな」

自然に笑みがこぼれる。

アナンも微笑みを返す。

これから戦う男に好感を持つことが悪くなかった。

「では、とくとご覧ください。我がヴォルクルス・コーアン派の秘術を」

「オーン」としか聞えない呪言がアナンから発せられた。

低く発せられた音声の振動増幅され、総務の窓を衝撃波が叩く。

臨界点まで増幅された衝撃波は窓を打ち破った。

アナンは目の前から消えていた。

どうやって、という事は考えなかった。

目の前のアナンからは目を放さなかった。

消えるような技術を持っている事が自然だった。

総務の被害は些細なはずだったが平静を失った職員が悲鳴を挙げていた。

視線を外に向ける。

外ではアナンの足下の魔法陣が薄く輝いていた。

60メートルほど離れているが呼吸の乱れは認められない。

生身の体術ではないだろう、これが魔術なのだろうか。

アナンの地面から岩石が隆起し、瞬く間に土くれの巨人が立ち上がる。

20メートルは超える体を動かすたびに岩同士がこすれ合い、脆弱な部分が体から脱落し始める。

これが無機物に一時的な生命を与える、ゴーレムの召喚と呼ばれるものだ。

「これがデモンゴーレムにごさいます。では存分に闘ってください」

アナンの姿が霧散するように消えた。

デモンゴーレムの赤い複眼が輝き、ゆっくりと歩き出す。

ジジは携帯モジュールを取り出し、ミラージュのAIに接続する。

「マスターの接続を確認しました。 命令の入力を願います」

AIの合成音声に応答する。

「ミラージュ、待機状態から通常出力まで上昇」

「通常出力まで上昇。 マスターの12時方向にANKNOWNを確認しました」

「ANKNOWNを敵として識別」

「識別完了」

「近くにシャルロットは居るか」

「肯定」

「彼女に搭乗させる」

「対象の操縦技術に不安があります」

最近このAIは人間のような物言いをする。

人間の様な直感を働かせ、今の様な曖昧な回答をするのだ。

「モーションセレクトをAI側に一時移譲する」

「了解」

このAIは今の何気ない会話の中に、不確定の未来を予測し警告と解決案を導き出している。

無機質な合成音とのやり取りではあったが、人間とのコミュニケーションと近い感覚を覚えた。

デモンゴーレムが右手を振り下ろす。

剥がれ落ちた岩塊が放たれる。

一つ一つが致死性の威力を秘めた岩塊が着弾する。

朦々と粉塵が舞い上がり、辺りの視界が曇り始める。

ジジはその粉塵の中に飛び込んだ。

背後のデモンゴーレムが振りかぶるのだが、次の投擲も当たらなかつた。

濃霧の様な粉塵の中を北にある演習場へ向かって駆ける。

召喚されたデモンゴーレムを撒く事に、大した労力を要さなかった。

濃い粉塵の中を縫うように駆け、800メートルほどは離れただろつ。

一つ一つの攻撃は破壊力が大きいのだが、視認から行動への時間差があまりも大きい。

加えて精密な動作は苦手のように岩塊の投擲は目標が定まらず、周囲に石を撒き散らしているだけだった。

『ジジ！無事ですか』

「肯定だ」

携帯デバイスがシャルロットの通信を伝える。

ミラージュが低速で歩きながら演習場へ辿り着く。

『シャルロットの効果的な交渉でハンガーのロックが解除されました』

「間借りしている場所を壊さなければいい」

やはりこのAIは人間の様な物言いをする。

一般的なPTやAMのAIは要求されてもいない私見を述べるわけが無い。

むしろ私見や感情を持たない事が普通なのだ。

ミラージュが降着姿勢になる。

コクピットハッチが開き、ワイヤーが降りてくる。

ワイヤーのグリップを掴むとワイヤーが巻き取られ、コクピットに辿り着く。

サブシートに座るシャルロットが安堵したように微笑む。

「座学とシミュレーターでここまで出来れば上出来だ」

『否定。 AI側の自動操縦が9割』

「お前の批評は後で聞いてやる。 目標を殲滅する。 ハッチ閉じる」

『了解』

「お喋りなAIです」

シャルロットがメインシートから後部のサブシートへ移る。

シートにはまだ他人の温もりが残っており、違和感を感じた。

「特にラ・ギアスに来てからは、よく喋るやつになった」

『目標が本機を視認。 目が合いました』

やはり人間のような物言いだった。

「巡航出力から戦闘出力へ上昇」

エンジンが静かに力強い駆動音へと上昇していく。

『了解』

操縦桿のホイールとパネルを操作して、機体のコンディションを
図示させる。

人型を分割したアイコンのほとんどが緑と僅かに黄色で表示され、
青色で表示される稼働状態が良好なパーツは無くなっていた。

それでもランとミラージュの整備を実施したおかげで、機体側で
は診断されにくいフレームの歪みなどが無い事を確認できた。

未だミラージュの性能に減退は診られなかった。

「シャルロット携帯武装を報告しろ」

「左肩にトライ・ビームシールド、腰に大型ビームサーベル、右手
にリボルバーガンです」

内心舌打ちをした。 右手のリボルバーガンはラ・ギアス製の火
器のため、地上世界の兵器との相性が非常に悪い。

人間用のリボルバーと同じなので撃鉄を引いて、引き金を引けば
発砲できる。

しかしこの銃自体の照準システムがラ・ギアス製の精霊コンピュ
ーターとしか連動せず、精密射撃は望めない。

「ショット・モーション、マニュアル043を適用」

『了解。 警告、銃口は常に目標に向いています』

「いくぞ！」

『目標との距離500』

戦闘出力のエンジンが低い駆動音を響かせる。

ミラージュはテストドライブで浮遊しながらデーモンゴーレムに

接近する。

右手のリーボルバーガンが火を吹く。

轟音と共にデーモンゴーレムの腹部に着弾し、体を構成する岩塊がそぎ落ちる。

『反動補正を入力しました』

すかさずA Iが無機質に報告する。

続けざま右足に3発命中させる。

半分ほどの細さになった右足が自重を支えきれずに自壊する。

倒れ、崩れた岩塊そのもののデーモンゴーレムの頭部らしき場所に残った2発の弾丸を撃ち込む。

デーモンゴーレムの呪詛の様な悲鳴が消える。

「終わりましたか」

背中側のサブシートからシャルロットの安堵した声が漏れる。

「……いや、術者が健在の場合はゴーレムは組成する物質のある限り何度でも再生する。本の受け売りだがな」

『目標の熱源上昇』

A Iがディスプレイの左端に、デーモンゴーレムの温度帯を図示する。

デーモンゴーレムの温度が黄色から高温を示す赤へと変動する。

ミラージュが弾薬の空になったリボルバーガンを地面投げつける。

リボルバーガンが地面にめり込み、岩塊が群がるように集まる。

いくつもの岩塊が寄せ集まり、リボルバーガンを押しつぶし、銃身を捻じ曲げる。

「チッ」

ミラージュを退かせ、デーモンゴーレムの残骸から距離を空ける。

(いかがですか、秘術石白)

アナンの念話が頭に響く。

「ジジ殿。この念話は」

「俺の腕試しをしたいという奇特な坊さんだ」

(貴殿の飛び道具は尽きました。降参してはいかがですか)

「黙れ」

操縦桿のホイールを操作して、大型ビームサーベルのチャージ状況を表示させる。

「出撃と同時にサーベルのエネルギーチャージは行いました」

サブシートのシャルロットが言う。

ジジが頷く。

ミラージュが腰部に把持している大型ビームサーベルを右手に握る。

「トライシールド接合解除」

ミラージュの左肩の円盤状のシールドが外れ、それを左手に握る。

（まだやるつもりですか？ これ以上は無駄な損耗でしかありません）
ぬ

「坊さんの説教を聴く気は無い。せいぜいこれから粉微塵になる
ゴーレムをまとめる念を絶やさないと事だ」

サーベルの出力を全開にする。

罅口から夥しい火花が飛び散り、刀身が伸びる。

灼熱の刀身が地面を焦がし、熱気が大地をえぐる。

「やれ」

ミラージュが灼熱の刀身をデモンゴーレムの残骸へ向けて振り下ろす。

振り下ろされる度に残骸が弾け、その都度デモンゴーレムの悲鳴がこだます。

20回ほど使った時、ビームサーベルの刀身が消失した。

『ビームサーベルの連続稼働限界。 強制冷却。 再起動まで60

秒』

（万策尽きましたな）

念話が頭に響く。

細切れのデモンゴーレムが集まり、地面から体が隆起し始める。

「トライシールド、3基並列駆動」

『了解』

円盤状の盾の三つの丸い突起が開放される。

一つ一つの突起がビームシールドとして機能するビーム発生器が起動し、ミラージュを覆い隠すほど巨大なビームシールドが発生する。

『警告。シールドの駆動限界時間まで7.5秒』

「テストドライブ出力最大」

ジジは音声入力と同時に、操縦桿を引く、

『重力ブレーキ作動。解除をトリガーへ移行します』

ミラージュのバックパックから燐光が漏れ出す。

シールドを突き出すミラージュに地面の岩塊を吸収し、肥大化したデモンゴーレムが覆い被さる。

トライ・シールドのビームがデモンゴーレムを焼く。

炭化した部分が脱落し、次々と新鮮な部位が接触面に押し出される。

デモンゴーレムは地面を吸い上げ、ミラージュの2倍ほどの大きさにまで成長していた。

『ビームサーベル冷却完了』

AIが告げる。

「シールド限界時間まで残り1.4秒！」

サブシートのシャルロットが叫ぶ。

「重力ブレーキ解除」

ミラージュのバックパックの燐光が爆発し、今まで押さえ込まれていたテストドライブの斥力場が解放される。

ミラージュが一瞬にしてデモンゴーレムごと上空に飛び上がる。

術者の念が途切れ、デモンゴーレムから力感が失せる。

ジジはその時を見逃さなかった。

ミラージュとデモンゴーレムの体勢を入れ替え、デモンゴーレムを地面に向けて蹴り落とす。

「サーベル出力最大」

テストドライブによって音速まで加速した機体が、落下するデモ

ンゴーレムにビームサーベルを振り下ろす。
灼熱の刀身が翻り、デモンゴーレムは空中で四散した。

野外演習場の西側入口にアナンが立っている。

ジジはそれを見つけるとミラージユをそこに着陸させた。

着陸の風圧がアナンの僧服を大きくなびかせる。

アナンが巻き上げられる埃に頓着した様子は無かった。

ミラージユのコクピットハッチが開かれ、ジジとシャルロットが

巨大な手に載せられて地上に下ろされる。

「まさか私の秘術が敗れるとは思ってもありませんでした」

低いアナンの声がよく通った。

この男はよく逃げなかったものだ。

相対したジジの胸中には驚きと共に、僅かだが好感に似たものがある。

アナンは今無造作に命を危険に晒している、そんな愚かさは嫌いではなかった。

「坊主にはこれが限界だろう」

「ほう」

「この術の肝は不意打ちで相手を押しつぶす事だ。わざわざゴレムを召喚する必要は無い」

「地上人らしい考え方ですな。 戦闘に対する探究心が旺盛だ」

「地上人は人殺しが熱心だ、と言いたいんだろ？」

アナンは肩をすくめながら「さあ？」とはぐらかす。

遠くからサイレン音が響き始める。

規則的な甲高い音が近付いてくる。

「私を突き出してください」

アナンが表情を変えず、ジジに両腕を差し出す。

ジジは口元に薄く笑みを浮かべたまま、答えることはない。

3台の車両がミラージユから少し離れた場所に停車し、武装した兵士がジジに駆け足で集まる。

敬礼をする。

指揮官が前へ出て敬礼を返した。

互いの挨拶も手短に済ませ、ベラン中尉が話を切り出した。

「ジジ・フラグ殿、邪教徒が基地へ侵入したようだが、術者はどこへ」

「邪教徒？知らんな」

アナンは表情を変えず頷く。

ジジは内心アナンの変わり身苦笑するが、この男を突き出す気にはならなかった。

突き出すくらいならば殺していただろう。

「しかし貴殿が闘っていたのはデモンゴーレムであろう？」

指揮官の横では、軍服の色の違う男がメモをしている。

ジジは時折観察するような視線を向ける男を、居ないものと心に決める。

「俺はこの僧侶の除霊を手伝ったに過ぎない」

顎で指し示すと、隣のアナンが拝礼をした。

「今回のデモンゴーレムの発生は偶発的なものと思われます。供養されない死霊が数百集まり大地に憑依することがあるのです。教義の申すところでは、死者が供養を望むために基地の土地に憑依するとあります。例えば再び肉体を得て、破壊される事で霊質を下げることができます。霊質さえ下がれば一般的な供養で浄霊することが可能ですから」

「あなたは？」

「私はアナン・トゥトウス。除霊の相談をガワン様より頂き、軍営を訪ねたところ、偶然デモンゴーレムの召喚に立ち会ってしまったのです」

「原因は分かりますか？」

「申し上げにくいのですが、この国のいたるところで供養できない霊が溢れております。いつどこでデモンゴーレムが自然発生してもおかしくない状況なのです」

アナンがシャルロットに視線を流す。

「声大きい……肅清の事を軍営では言うな」

ベランの横では男がメモを取り続けている。

ベランはその様子に嫌悪感を隠さず、ため息を一つ漏らす。

「ジジ・フラグ殿、除霊をするのでしたら前もって公安課へ申請していただきたい」

「結果的に俺のやった事だからな、報告書を出せばいいのだろう？」

「事情聴取もあるのでそこで待っていてください。私は本部に報告をします」

アナンはベランたちが遠ざかった事を認め口を開く。

「仕官の推薦を断ったと、ガワン殿から聞きました」

「そうだ」

「何故？」

「この国の兵士となることは、一人の男として義に反する事となる。だから断った」

「將軍への推挙だったとも聞きました」

「くだらん」

「いい暮らしができたと思います」

「一人の男として恥ずべき生き方だな。そろそろ死ぬかアナン」

「気分を害しましたか？」

「お前の嘔きで心が動くのならば、もっと要領の良い生き方をしている」

「そうですね、あなたには今の生き方より更に茨の道を薦めようかと思えます」

「お前は今はじめて面白い事を言ったぞ。言ってみろ」

「私はガワン殿の仕官を求め、貴殿を伺ったのです」

ジジが自分を指差す、それをアナンが頷く。

「ガワンにこの国を捨てられるのか」

「無理でしょう。この国と心中するつもりです」

「それも男の生き方だ」

「今でこそ王位継承から漏れたラン様の従者をやっておりますが、以前は親衛隊の隊長まで務めた人物です。主さえ得れば手腕を振るえます」

「この国に地盤を持たず、何の後ろ盾も無いような男に仕えるか？」

「ガワン殿や私が後ろ盾になればよるしいだけです。地盤などジジ・フラグ殿の戦闘力なら容易く領土を切り取れます」

「ただの地上人でしかない俺の命令など誰も聞かんだろう」

「そのためにも我等が後ろ盾になります。あなたに自覚は無いようだが、このラ・ギアス世界の住人にとってあなたは天敵のようなものだ。なぜならあなたは調和や平和の事を考えず、破壊から全てを始める。話し合いよりも暴力から秩序を生み出そうとしているのだから」

「我ながら迷惑な男だ」

「あなたには、我が教団の信者を民として欲しいのです。それにガワン殿を頼る虐げられたこの国の民を」

「お前は馬鹿だな」

ジジの口元から凍えるような嘲笑が漏れる

「俺が本気でそんなもののために戦うと思うのか？おれはただ己の使命に忠実なだけだ。偶然シャルロットの仇討ちに助力している事で俺が善人に見えるだけにしかすぎない」

「馬鹿な。あなたは何を辱めるために戦っているのか？」

「俺にとつて戦うことは、飯を食って寝る事と何も変わらない。ただの日常に過ぎず、そこから得るものは何も無い」

「やはり……あなたは聖人かもしれない。人では至れない境地に達している」

アナンの表情に初めて感情が籠る、

驚愕と歓喜の入り混じった視線がジジに向けられた。

「黙れ、今ならお前を殺せそうだ」

アナンは口を閉る、その表情からまだ歓喜は抜けていなかった。

「私は自分の事を浅ましいと思いました」

ジジの背後で黙っていたシャルロットが口を開く。

シャルロットに向き直ると、彼女は視線を落としていた。

「何だ」

僅かな逡巡があり、シャルロットは重い口を開いた。

「私と同じような身の上で苦しんでいる者が居るといふのに、私だけ救われたいと思っていたのです」

「そういう約束だ」

「……しかし」

「お前は坊主の説教でのぼせ上がっているのか！ あの王妃を討つ事に集中しろ。お前の様な半人前以下では返り討ちが関の山だ」

かっと頭に血が上がり、拳を握っていた。

思わず怒鳴ってしまった。

シャルロットは俺の剣幕に驚いて瞳を伏せる。

「申し訳ありません」

消え入るような声だった。

アナンの詐欺師のような説法で気が立っていたとはいえ、シャルロットに当り散らしてしまった。

あまりの惨めさに頭から熱気が抜けていった。

「お前は何故俺を信じる」

ため息とともにジジが言う。

「え？」

「聞いたままの意味だ」

「……」

「いや、いい。聞くべき事ではなかった。お前は俺の従者なの

だ。答えようの無いことだった」

「上手く申し上げられません」

「思ったままを言え」

「調練は痛く苦しいですが、ジジ殿は私と本気で立ち合って下さいます。お仕えしてから今までの戦いで、ジジ殿がただならぬ人物である事は分かりました。そのような方が私のために時間を割い

て頂くことは嬉しいのです。今はジジ殿の従者をしている事が喜びなのです」

いままでこれ程無垢な好意を向けられた事があつただらうか。その思いが怒りの余熱を冷却させていった。

ただたどしい口上ではあるが、シャルロットの真意が伝わった。それは喜ばしい事なのである。

「そうか」

「どうか気を静めてください。アナン殿もガワン殿も民衆に頼られ苦しんでいるのです」

「苦しむ？」

「ジジ殿ように自分の死と守るべきものの死を受け容れるほど強くないからです」

「ふむ」

それを強さというのだろうか。

人は必ず滅ぶ、ただその事実を受け容れているにしか過ぎなかった。

「私は思うのです……ジジ殿に課せられた試練には意味があると。

私には今までの試練そのものが聖なる試練としか考えられないのです」

試練に正邪などあるものか、俺は課せられた使命にただ忠実に生きていくにしか過ぎない。

しかし、心にはペネリウスの事が楔となつて打ち込まれている。

今の試練とも評せる事件は、神が授けたものではないと断ずる事ができない。

人ならざるものの力によって召喚された事は、ほとんど疑う事ができなかつた。

シャルロットが熱気の籠つた眼差しを向けている。

その事実を受け容れ始めている自分の心に僅かな驚きがあつた。

「おい、アナン。ガワンに会うぞ」

背後からアナンの返事が聞えた。

ジジとシャルロットの主従は、グナム市の郊外に有るガワンの屋敷にアナンの案内でやってきた。

「一つだけ言っておく。俺は奴を殺すつもりで来た」

ジジは門前で立ち止まると、振返らずにアナンに言った。

「シャルロットを俺に預け、仇討ちまで押し付けた。ただ己の使命から逃げ回っているだけの男ならば殺すだろう」

「分かりました。私にはどうすることもできません」

再び玄関へ歩き出す。

背後のアナンの呼吸が変わったような気がした。

「アナン殿、右手のモノを捨ててください」

シャルロットがアナンを制止する。

右手を掴むシャルロットの力は有無を言わせない程力が籠っている。

「今のジジ殿は警告をせずに殺します」

「分かりますか」

アナンが首を傾げる。

「咄嗟に気配の様なものが変わったように感じました」

「アナン」

呼びかけたジジが振り向く。

アナンが崩れるように倒れる。警戒心がジジに向いた隙を突いて背後からシャルロットが手刀を後頭部に打ち込んだのだ。

どうしても小細工を弄する悪癖のある男であることは、初めて会った時から感じていた。

腹が括れるようで、まるで腹が括れていない。

これからのガワンとの話では何かのはずみで殺しかねなかった。

「行くぞ」

ジジはガワンの待つ居室へと進む。

扉を開くと、リビングのソファアにガワンが腰掛けている。ガ

ワンは、来たか。と言うだけでワインを飲み続けていた。

「また俺を使って面倒事をしたいそうだな」

ガワンの背中に言葉を投げつける。

「俺が王の器だとも思っているのか？」

「ああ、ただし暴君としてだ」

「案外お前の方が向いている。俺はそう思う」

「そうだな。間違いなくジジ・フラグには王の適性が無い」

まあ飲め。そう言いながら、ガワンは置いたグラスにワインを注ぐ。

椅子に座りガワンと向き合う、注がれた液体を一気に飲み干す。

普段なら美味しく感じるはずの味ではあったが、僅かに昂ぶった感覚が味わいという事は無かった。

背後ではワインを勧められたシャルロットが固辞していた。

ガワンが肩をすくめながら話を続ける。

「ただし王たる器を持っている」

「俺の知らない俺だな。 聞こう」

「命を命と思わないところさ。 冷徹とも言える。 常人にはなか

なか出来ない事さ。 自分の命は惜しいし、他人の命なら尚更だ。

現にお前はシャルロットを助けながらその命を危険に晒している」

「あれには使命がある。 ただそれだけだ」

「愛する者に死を命じることが出来る。 それが王たる資質だろう。

根源的な部分に公平さを備えなければ、王などやれるものではない」

「……………」

「否定はしないのか？」

「今の胸の内にある、わだかまった気持が言葉にならない。 だが

ら否定はしない」

「私には到底至れない境地だ。 私は全てのものを守ろうとして破

綻したようなものだからな。 結局のところ友はおるか誇りと忠義を失ってしまった」

「だからお前には王としての資質が無いと？」

「確かに私はお前より遙かに高い次元で組織を運営し、管理することが出来る。ただしそれは俺でなくとも出来るありふれた才能でしかない」

「俺にとつては稀有な才能だと思う。是正すればいいだけではないのか？」

ガワンが首を振る。

その口元には自嘲したような笑みがあった。

「現に私は忠誠心と友誼の板ばさみで決定的な失敗をしている。ジジ・フラグには考えられない愚かな結末だろうが」

「ああ、お前は愚かだ。どちらかを選べばお前は救われていた」

そうだ。ガワンが強ク言い、グラスの中の液体を飲み干した。

右手で眉間を押さえながら苦悶する姿は、行き詰まりどうしようもなくなつた男の苦悩をよく表していた。

全てを救うという、破綻した理想を抱いた時点でこの男はこうなるはずだったのだ。

今の胸中に憐憫は無い。

「私は誰も幸福にする事はできない」

ガワンが淀んでいたものを吐き出すように言った。

「俺にはできるといふのか？」

「天秤の片方を救うことができる」

「片方を殺す事になるな」

「私は救う側に立ちたい」

乾いたような声色だった。

今のガワン・カーワンは理想と忠義を失つた男である。しかし全ての精神的な支柱を折られて尚、残酷な選択を己に課し続ける願望を抱いていた。

この男も死ねない悲しさを持った男なのだ。

「都合の良い話だ。自分の背負うべきものを他人に押し付けるのだからな」

「我ながら情けない」

「呆れた、自分で言うのか。俺が受けると思ったのは何故だ？お前が打算無しで動くとは思えない」

「ジジ・フラグには何らかの主義や理想は無い、借り物の動機で戦っているからだ」

その通りだ。

守るべき家族や故郷を持ったことがない男がなぜ理想を持てるのか。

戦争を日常にする男には理想は無い、あえて言えば理想は実現している。

絶え間なく戦争は続き、地底世界でもそれは同様だった。すでに俺の日常の継続は約束されていたのだ。

人が愚かさを捨てない限り、ジジ・フラグという男は生存し続けることができる。

「私ならお前に戦う理由を与え続ける事ができる」

「言われたくない事をはつきり言う」

「理想に実力が伴わない男と、理想の無い豪傑、この二人が組む事は必然ではないか？何より私はジジ・フラグが嫌いではない」

「女を口説くように言うなよ」

我ながら救いようが無い。

一人で淡々と死と破滅に向かうのが自分の人生の過程だと思っていた。

一人で死ぬるとするのは都合の良い願望でしかなく、もっと多くのしがらみを抱えることになるのだろう。

義父の生き方をなぞるつもりは無かった。

この選択がペネリウスによって操作された運命だとしても後悔は無い。

「やるぞ。 組むならお前だ」

「ああ」

「だが、たった二人で始めるのか」

「お前はいつも一人から戦いを始めたのではないか？」

「分かるのか？」

ガワンが頷く。

シャルロットの復讐が終わるまで、はじまることはない。それはガワンも承知している。

生還する事自体が博打のようなものだろう。

薄氷を踏むような危うい戦いが好きだった。

危機を乗り越えた時に生きていることを実感するからだ。

立ち

止まっているような生き方は死んでいる事と変わらない。

いま自分の性とも呼べる部分が喜び、吼えている。

11の章のさいごに（機体解説）

ゲシユペンストmk?前史

ゲシユペンストmk?とは第三世代PTの複雑化した操作に対応すべく開発された機体である。

ゲシユペンストは世代を重ねる度に高性能化していくのだが、それは操作性を著しく犠牲にした上での進化だった。

その進化の破綻は性能の向上に大きく貢献した重力推進機関（テスラドライブ）の登場により明確になる。

操縦者は空中での挙動を新たに入力していくのだが、機体の挙動とテスラドライブの指向性も計算しなくてはいけない。今までの技術的蓄積が無い分野のため、センスの無い人間には使いこなす事はま

ずできないだろう。
かといって初期設定のモーションパターンを使い続けている相手は行動を読まれるおそれがある。

テスラドライブの操作に悩まされた上、機体の操縦、出力制御、照準、ダメージコントロール、通信管理etc・・・すでに搭乗者一人では管理しきれない現状に至ってしまった。

ゲシユペンストmk4のコンセプトとはこれらの煩雑な操作を機体側AIで処理してしまうことに集約される。

当然ながらAIを教育していくという工程が存在するが、1機に操縦士を2名使うコストと比較するとAIに処理させるほうが安上がりである。

ゲシユペンストmk?・1・0

この機体は第三世代のPTとしてテスラドライブを搭載した機体である。

あくまで制御AIと機体のマッチングを試すために作られた機体なので固定武装は装備されていない。

むしろ装甲類は極力排除された設計である。

脚部冷却ユニット、スカートアーマーなどを排除したのはテスラドライブを運用するためだといっても過言ではない。

この機体の動力は量産型ゲシュペンストmkIIに使われている熱核融合炉を利用している。

しかしこのエンジンではテスラドライブを安定運用するにはギリギリの出力だといえた。

第二世代PTでテスラドライブを搭載した機体にはヴァイスリッター（2700kw）アルトアイゼンリーゼ（4250kw）

第三世代PTでは量産型ヒュッケバインmkII（2300kw）量産型ビルトシュバイン（2500kw）ビルトビルガー（3500kw）ビルトファルケン（3600kw）

エンジンの出力は最低限2300kw相当は欲しいのだが、本機のエンジンの出力は1500kwである。

高速機動は可能であるが、エンジンに付加をかける兵器を同時に使用する事は不可能となる。

量産型ゲシュペンストmkIIが依然としてテスラドライブが装備された上位機種が開発されず、量産型ヒュッケバインmkIIが開発された経緯にはエンジンの出力不足という問題が存在している。

（量産型ゲシュペンストmkIIを純粋に陸上兵器として運用する場合、エンジンの出力不足という問題は無い）

さらに致命的な問題として、制御AIの教育不足が存在する。

そのためAIが学習するまでパイロットはほぼAIの補助無しに機体を制御しなくてはいけない。

テスラドライブを搭載して複雑になった操作も相まって、搭乗者であるジジ・フラグにははなはだ不評であった。だがこの人物のおかげで膨大な経験値が得られた事も事実であり、戦闘を経るごとにA I側の制御が上達し、搭乗者は操縦に集中できるようになっていった。

そして2・0「ミラージュ」へ

A I側の習熟と武装を実弾兵器に統一する事で出力不足を解決した本機は他の第三世代PTと性能を比べても遜色ない性能へと成長した。

その後戦闘で中破した本機は、A Iなどの中枢を新たに開発していた素体2・0「ミラージュ」に移植される事となった。

ゲシュペンストmkIV「ミラージュ」

エンジン出力 4600kW

全長23m 重量58.8t

1・0で問題となったエンジンはプラズマジェネレーターに換装され、装甲も従来機並みに装備された。

大幅に出力が向上したため、F40ショルダーガトリング1門、ハイパービームキャノン、多目的ミサイルコンテナ、等を追加で装備していても高速機動には何ら影響が無かった。

搭乗者はジジ・フラグ

異世界にて

アースブレイカー落下阻止作戦の終盤でこの機体は投入され、30分の戦闘で人型機体を23機撃墜するものの、偶発的な事故から地底世界ラ・ギアスに召喚されてしまう。

地底世界では遠距離武装の全てが弾薬切れで使用不能となってしまうものの、現地の兵器事情により地上世界と遜色なく運用されている。

ラ・ギアスでは神聖ラングラン王国の製作したサイバスター、ソルガデイ、ジャオームの3機種以外、高速空中戦等に適する機体が開発されておらず、ジジ・フラグと敵対したバゴニア連邦の新型魔装機アゲイドは機動力に圧倒され、7機を撃墜されることとなってしまふ。

現時点でミラージュの持つ速度のアドバンテージは大きく、陸上兵器としての性格の強い魔装機兵には天敵となるだろう。

#011の章のはじめに

あらすじ(4)

バゴニア連邦の離間の策にガワンの腹心アナンが察知した。

アナンはガワンに謀反を薦めるものの、ガワンはその進言には応じなかった。たとえ謀反が成功したとしても、戦後にアナンの率いるヴォルクルス教団との関係を追及され処断される事を予見していたからだった。

ガワンはアナンに新たな仕官先としてジジを紹介し、アナンはジジの実力を試す事となった。

アナンは必勝の魔術「石臼」を駆使してジジに戦いを挑んだ。崩壊したデモンゴーレムの残骸を囚にした「石臼」は魔装機兵から対人戦闘まで絶大な効力を持っていた。

ジジは戦闘の違和感を察知し、アナンは呆気なく敗れる。敗れたアナンは自分の主人であるガワンをジジに召抱えるよう薦めるのだった。

ジジは己の使命を他人に押し付け続けるガワンの真意を問いただすため、シャルロットを伴ってガワンの屋敷を訪れる。

ガワンは言う。中庸の道を取り続けた結果、国家に対する忠誠心と朋友を失ってしまった。

ジジにどちらかを選択していれば、今の破滅的な未来は無かったと指摘されるが、ガワンにはそれが出来なかった。

ガワンは言う。天秤のどちらかを「救う」側に就きたいと。

これは後悔と怒りで磨耗した男のたった一つ残った願望だった。

ジジ・フラグに主義や理想は無い。ガワンは理想を自分が担い、ジジに戦う理由を与え続ける事を提案する。

破綻した提案だったが、理想を持たない豪傑と、理想に実力が伴わない男が組む事は必然だった。

この章の登場人物

ジジ・フラグ

地上世界では著名な傭兵。戦闘技術全般に長ける。

ペネリウスの召喚魔術により、サザ公国へ召喚される。

> i 2 9 9 6 7 — 3 8 5 1 <

シャルロット・フラグ

サザ公国の建国功臣の末裔。謀略により家族を抹殺される。

ジジ・フラグに従者として下賜され、今は弟子となっている。

> i 2 9 9 7 0 — 3 8 5 1 <

ガワン・カーワン

サザ公国の建国功臣の末裔。元親衛騎士団長だったがその職を辞している。

今はラン・アーヴィンの従者となっている。

ラン・アーヴィン

サザ公国第四王女。整備兵として従軍している。

カミュ・神原

地上世界では有名な科学者。PT開発を黎明期から携わり、果ては個人でPTの密造密売を行っている。

ユナ・神原

カミュの娘。ペネリウスの召喚魔術によりラ・ギアスに召喚される。

ガンドレス

地上世界で作られたPT制御AI、機械でありながら自我を持っている。

サーヴァ・ペネリウス

古代ラ・ギアスの著名な魔術師。現代では神格化されている。
現在は幽霊として存在し、ジジ・フラグなどを召喚する。

朝の静謐な空気に鈍く体のぶつかり合う音が続く。

ジジは短い木刀を逆手に握りなおす。次第にジジの体からは力感が隠され、構のようなものは消滅している。

相対したシャルロットは微動だにしない。繰り返された三度の鏝迫り合いで強かに体を地面に叩きつけられていたが致命傷を避けている。ほとんど転げ回るように難を脱したようで衣服は土で汚れていた。

「俺は誰だ？」

「ジジ・フラグ殿です」

シャルロットの呼吸は荒い。肩が大きく上下し胸がふいこのように大きく膨らんでいる。シャルロットの握る細長い刀身を持った剣の切っ先が上下に乱れながら動く。

「違うな。お前の家族を殺した王妃そのものだ」

「違います」

「命令する今はそう思え」

乱れきった呼吸が強引に整えられ、穏やかな瞳が強い光を帯びて燃え始める。

シャルロットは背負ったもう一つの剣を抜いた。半身に体を晒し僅かに腰を落とし弓を引き絞るような構えだった。その足腰に溜められた力が剣の切先に殺傷力を纏わせる。

今の構えに防御は無い、相手より先に急所を刺す、それだけだ。

右と左の刺突のどちらが本命なのか。問題の本質は違う、先手で決めるのか後手で決めるのか、シャルロットの魂の本質が問われているのだ。

ジジが構えを変える。遅しい両腕が心臓と首を覆うように隠す。

二人が対峙する中庭にランとガワンの主従が現れ、無言で対峙を見ている。

ランが小石を踏み僅かな音を立てた時、対峙する二人の闘気が急速に沸点を超える。

シャルロットが大地を蹴って跳躍し、ジジも呼応するように駆け出す。

跳躍によつて右の剣を突き出しただけの刺突は十分な殺傷力を持つており、切っ先がジジの両腕の隙間を狙った。

ジジは木刀を突き出された剣の面に当てる刀身を折ろうとした。握りの甘くしてあったシャルロットの剣は弾かれて宙に舞う。

「ヤエー！」シャルロットの猿声が響く。残った左の刺突が捻られた腰の筋肉を動力にしてジジの喉元を狙う。

その一撃がジジに届く事は無かった。ジジの両手が剣を挟み込みシャルロットが押し込んででもまるで動かない。

ジジとシャルロットの捻り込む力が重なり、細い刀身が折れる。シャルロットは見開いた瞳をジジから反らさない。

「時間だ」
ジジが言う。

「はい」
シャルロットは折られた剣をじつと見つめた。

「今の剣を誰に教わった？」
「兄の剣を真似ました」

「何故だ」
「相討ちを狙いました。一度目の突きを囷にして二度目の突きで

決着を」
「死ぬつもりか」

「はい」
「出会ったときも死にたがっていたな」

「あの時とは違います」
「何が違う」

シャルロットは何かを言いかけたが瞳を伏せて、言葉を切った。
「言葉にたくありません。きっとジジ殿は私を軽蔑します」

ジジは軽蔑という言葉におかしさを感じた。難しく言うてはいるが嫌われたくないという意味表示で、それはシャルロットにとって珍しい事だった。

「言え」

シャルロットと視線が重なり、潤む瞳が何かを懇願しているようだった。

「生きたいと思ってしまいました。もっとジジ殿の傍に居たい」と熱を吐くようにシャルロットが言う。

「本当はお前の様な年頃の少女が俺の従者などやめるべきなのだろうな」

「嫌です。私はジジ殿の傍に居ればそれで……」

「俺の事情も考えずに言うものだな？」

シャルロットの髪に纏わる砂を払い、中庭の入り口で立ったままのランとガワンに視線を送る。

改めてシャルロットが二人を見ると、驚いたように体を強張らせる。取り繕う事もできず視線がジジとランを行き来する。

「衣服を整えてこい、客人だ」

シャルロットは背中を押され、駆けるように屋敷の中へと消えていった。

居間でジジ、ラン、ガワンの三人が卓に腰をつけると、程なくシャルロットが現れ、全員のカップに熱いハーブティーが注がれた。

「一ヶ月ほど前から軍の魔装機兵が襲われる事件が続いている事は知っていますか？」

ランが話を切り出す。

「ああ、シャルロットへ行く講義を聴きにくる者達がその話をしていたな。たった一機の襲撃者に四機がかりで手も足も出なかったらしいな」

「問題は兵士の練度ではなく、誰の犯行かということですよ」

「俺の名前が拳がった。そういう事だな」

ランが頷いて肯定する。

「姫様は王妃がお前を肅清するつもりだと考えているのだ」

「そうか」

ジジは穏やかな表情を変えずにカップに満たされたハーブティーを啜る。卓に置かれた蜂蜜の容器を手に取り、砂糖三杯分ほどをハーブティーに混ぜる。

気化した蜂蜜の風味が漂い、ジジはそれを満足そうに飲んだ。

危機感の無いジジの態度にガワンは渋面を隠さなかった。

「暢気に返さないでくれ」

「王妃の持ちうる駒では俺を殺せない、それは今まで返り討ちにした刺客の事で気付いているはずだ。あの人は無駄な事を繰り返すほど愚かな人物ではない」

「万が一にも」

「無い」

ジジはそう言うつと眼光鋭くガワンを見る。

「あの王妃はとても優れた感性を持っている。俺を殺せるだけの戦力を集めずに行動を起こすわけが無い」

「倒す手立てが見つかったのかも」

「お前はその動きを察知したのか？」

「いや」

「ならば行動を起こすことは無い」

ガワンが首を傾げる。その心には今まで王妃に煮え湯を飲まされ続け、不審な事を放って置く事が出来なくなっている。心には深いヒビのようなものが残っているのだ。

それはガワンの積み重なった敗北が自分自身への不信を拭えないように思えた。

「お前は敵の動きに気付かないほど無能なのか？ 少しは自分の感性を信じろ」

「だが……」

ガワンは僅かに思案すると、苦々しげに頷いた。

「私の母親も同じように罪を着せられ殺しました。本当に昔の事で、母の搭乗していたルジャノールにはあらかじめ時限式のプログラムが組み込まれ、王妃を認識すると攻撃するようプログラムされていたのです。嵌められた母はその場で護衛にコクピットごと潰されました」

ランが言う。普段の魔装機兵しか興味を持たない屈託の無さは影を潜め、憎悪が籠っているようだった。普段のランは行き場の無い怒りを機械整備に向けているのだろう。

「姫様の言う事は事実だ。残骸から回収したプログラムデバイスを復元した時にそのプログラムを発見した。だがどれほど捜査しても王妃に繋がる証拠は無かった。それよりも別件で追い詰め、王妃に付くメリットを潰せば、関係者の告白を引き出せると思っていたよ。すぐに浅はかな判断だと気付いた。気付いた頃には次々と対抗勢力を粛清し、中央から排除していった。殺れるときに殺っておかなかった結果どうしようもなくなったのだ」

「昔からあの王妃は大した胆力だな」

「どこが？」

ランが言う、語気には僅かに怒りが籠っていた。

「自分を狙わせた事だ。分かっているも機兵に自分を襲わせる事は出来ない」

「ジジ・フラグにも出来ませんか？」

「出来ないな。王妃の胆力をまず称えるべきだが、それ以上に親衛隊長を殺害できるほどの遣い手を配した計画性も秀逸だ。証拠ごと証人を潰す事も忘れていない、結果的に証拠は見つかったようだがデータを復元させている間に自分の周りを固めていった」

今の胸中に王妃に対する怒りは無い。地上人の自分に見ればあまりにもありふれた事としか感じないのだ。

「分かるか？ あの王妃とはここまで独創的な戦士だ。下賤な殺

人者と蔑むかぎり誰も王妃は殺せない」

「私には権力欲に取り憑かれた人にしか見えません」

ランが首を振って否定する。

「お前を粛清せず軍に置き続けている理由は、暴発とそれに呼応する勢力を一気に滅ぼすためだ。そのためガワンをお前の従者に配置している。どちらかが暴発すれば連鎖的に事態が進むことを見越してな」

「地上人のあなたがそこまで洞察していたのですか？」

「これから戦う相手だからな」

相対するランの心の昂ぶりが急速に冷却し、冷静さを取り戻していく。それは憎悪が消滅したのではなく、怒りの温度が冷たくなっただけともいえた。

今のランを見れば王妃の狙いが分かる。怒りで暴発した人間の傍に武器や権力などの力を置けば感情を処理するために人間はそれを用いる。あとは暴発した勢力を叛徒として摘み取ればいいだけなのだ。

「この事件は別の誰かが俺に似せて事件を起こしている。それも杜撰なやり方だな」

「誰が」

「繰り返すが王妃ではない、今回の事件を利用する動きはあるだろうがな」

「……我々から動くのか」

「王都にバゴニアが侵攻する前に事態は進めなければいけない。」

そろそろ時間切れだ」

「ゾナン宰相が強襲のための物資を回し、秘密裏に姫様のガレージに運んでいる。参戦する兵士の選別は終えた」

ルルル姫とカインの名前が挙がった。4機による強襲、打撃力には不安が残る。

「ルルル様の参戦で王妃直属の私兵は動きにくくなるはずだ」

「カインは、息子の事は良いのか？」

「この国で腕の立つ操者はアレくらいしか思い浮かばなかった……
それだけだ」

「そうか」

「シャルロットに機兵はありますか？」

「用立つ機体はルジャーノールくらいでしょう」

ジジの後ろに控えていたシャルロットが口を開いた。

「私のブローウェルをシャルロットに」

ランが言う。

「……良いのか？ その機体はお前が王妃に復讐するために組み立てたものではないのか？」

「私に王妃は倒せません、せめて同じ志を持つ人に使ってほしいです」

ランが微笑む。

「そうか。シャルロットを同志と思うのなら自分で頼めばいい」
ランが頷く。

「4機で強襲か」

ガワンの声は苦渋に満ちている。 動員する戦力に不満があるようだが、強襲任務というものは数だけを揃えて成功するものではない。 体裁を取り繕うだけの部隊を編成すれば間違いなく強襲は失敗する。

「少ないと思うのか？」

「ああ。 お前の言う通りこの世界の住人で魔装機兵の高機動戦闘を習熟している人間は少ないだろう。 ラングラン王国が僅かに保有するだけだが……その推察が外れている事も考えられないか？」

「王都が今まで爆撃されていない事が答えとなっている。 バゴニアには対空防御を抜ける性能の魔装機兵は存在しなく、陸軍の戦力で押し切るはずだ。 魔装機兵を旧来の戦術に組み込んだだけの軍では俺に勝つことはできない。 いずれ戦術や戦略は洗練されていくが、技術レベルが急上昇している現代では、技術レベルに戦術構築が追いつけない。 今は強力な個性が多を圧倒する時代なんだよ」

「数を揃えてどうこうできる話じゃないのか……」

「ガワン、納得しましたか？ 戦いはジジに任る。それで良いのです。戦闘に素人な私だからこそ、ジジの理論は現代の本質を述べているように聞えました。ガワンの言う事は理に適っています。が、決定的に速度を活かせない、そもそも強襲は成功しないでしょう」

「その前に片付けておくべき事はやっておこう。強襲を前に俺の模倣犯が現れた事は看過出来ないからな」
ジジが立ち上がる。

思えば遂に、バゴニア連邦とサザ公国は開戦し、全ての事態が止まる事を許さず動き続けていた。運命の歯車が急速に加速している。誰もが流れに振り落とされないために必死なのだ。

振り落とされれば理不尽な死が待つ。

まだ生きている。だから悲観するほど状況は悪くないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9537v/>

スーパーロボット大戦A B s ・ O Gサーガ〔 1 〕

2012年1月10日11時01分発行